松浦市文化財調査報告書 第15集

小　船　遺　跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

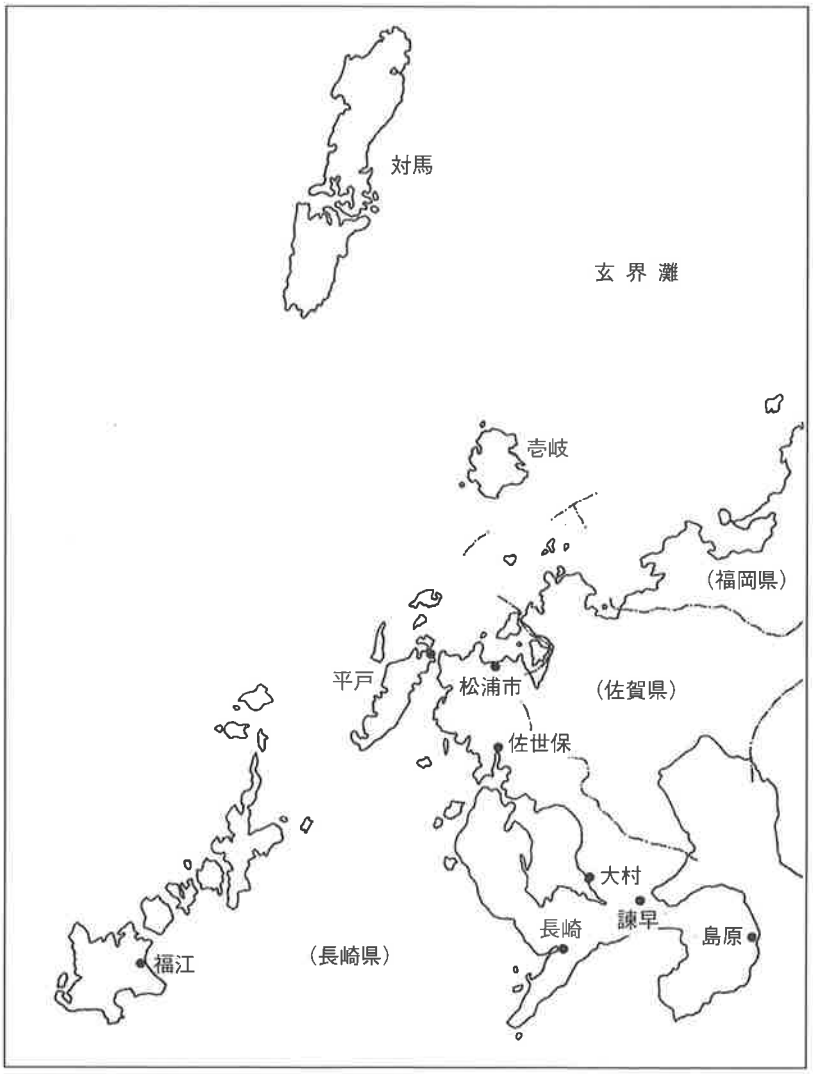
2000

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第15集

小　船　遺　跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2000

長崎県松浦市教育委員会

遺跡遠景

調査風景

発刊にあたって

このたび、国営農地再編整備事業川内地区の工事に伴う『小船遺跡』の発掘調査報告書を公刊することになりました。国営農地再編整備事業関連では、『松浦・今福遺跡』に引き続き、２冊目の公刊となりました。

この報告書は、松浦市教育委員会が、事業主体である九州農政局北松農地整備事業所の協力を受けて発掘調査を行った成果を取りまとめたものであり、決して満足のできるものではございませんが、学術研究に少しでも寄与でき、市皆様が埋蔵文化財に対する理解と認識、さらに文化財保護の向上に役立てれば 幸いと存じます。

松浦市における国営農地再編整備事業については、計画段階から埋蔵文化財の保護には九州農政局北松農地整備事業所に、特に配慮していただき、部分的な発掘調査にとどめていただき、遺跡を保存することができました。

今回の調査に際しましては、関係者のご理解と、多くの方々のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々に対し心から感謝を申し上げます。また、九州農政局北松農地整備事業所及び長崎県教育委員会をはじめ多くの人たちのご指導、ご理解を賜りました。ここに厚く感謝申し上げまして発刊のご挨拶といたします。

平成12年３月31日

長崎県松浦市教育委員会

教育長　黒　川　壽　信

例　　言

1．本書は、国営農地再編整備事業に伴い松浦市教育委員会が平成10年度に実施した松浦市御厨町山根免に所在する小船遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査及び本報告書作成にあたっては、九州農政局北松農地整備事業所と負担契約を結び松浦市教育委員会があたり、同事業所・長崎県文化課・松浦市農林課・地元川内地区の協力を賜った。
3．調査は、松浦市教育委員会生涯学習課が行った。
4．本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ章を中田敦之、第Ⅲ章を明石拡子があたった。第Ⅳ章は（株）古環境研究所による。
5．石器計測表は明石拡子が作成した。
6．遺構の実測は明石・高原愛があたり、遺物の実測は明石が行った。
7．遺構・遺物の製図は、宮崎朝美・中田があたった。
8．遺構・土層の写真撮影は、明石・高原があたり、遺物の写真撮影は、中田があたった。
9．出土遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたり、市立調川小学校にて一括保管している。報告書刊行後は、同校の郷土資料室に展示予定である。
10．写真図版の縮尺は不統一である。
11．本書の編集は、中田・明石があたった。
12．本書は、松浦市文化財調査報告書第15集にあたる。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに
　1．　発掘調査に至る経過……1
　2．　調査関係者……2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
　1．　地理的環境……3
　2．　歴史的環境……4
　3．　試 掘 調 査……11
第Ⅲ章　遺跡の調査
　1．　調査の概要……15
　2．　層　　位……16
　3．　遺　　構……19
　4．　遺　　物……24
第Ⅳ章　科学分析
　1．　小船遺跡における植物珪酸体分析……27
第Ⅴ章　ま と め……30

挿　図　目　次

第１図　松浦市地質図……3
第２図　松浦市遺跡分布図（１／５００００）……５～６
第３図　小船遺跡位置図（１／１００００）……11
第４図　試掘調査区設定図（１／１５００）……12
第５図　試掘調査出土遺物（２／３）……13
第６図　小船遺跡範囲図（１／２０００）……14
第７図　調査区設定図（１／１０００）……15
第８図　調査区土層図（１／８０）……16
第９図　調査区土層図及び遺構配置図及び遺物垂直分布図（１／８０）……17～18
第10図　出土遺物１（２／３）……20
第11図　出土遺物２（２／３）……21
第12図　出土遺物３（１／２）……22
第13図　出土遺物４（１／２）……23

表　目　次

表１　松浦市遺跡一覧表……７～８
表２　小船遺跡出土石器計測表……26

図　版　目　次

図版１　調査風景……33
図版２　調査風景……33
図版３　Ａ１区北壁土層……34
図版４　Ａ２区北壁土層……34
図版５　Ａ２区西壁土層……35
図版６　Ａ３区西壁土層……35
図版７　Ａ４区西壁土層……36
図版８　Ａ５区西壁土層……36
図版９　Ａ６区西壁土層……37
図版10　Ａ８区西壁土層……37
図版11　Ａ４区ピット検出状況（西から）……38
図版12　Ａ４区ピット検出状況（東から）……38
図版13　Ａ６区ピット検出状況（南から）……39
図版14　Ａ６区杭検出状況（南から）……39
図版15　Ａ６区遺物出土状況……40
図版16　Ａ５区遺物出土状況……40
図版17　出土遺物１……41
図版18　出土遺物２……42
図版19　出土遺物３……43

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経過

九州農政局北部九州土地改良調査管理事務所（以下「九州農政局」という。）では、土地利用の整序化を図り、農用地の効率的な土地利用と生産性の高い基盤を形成するため、既耕地を再編整備する区画整理497ha、及び隣接する未墾地等の開畑７haを一体的に施行し、高収益性作物の導入を行い、経営規模の拡大と中核農家の経営合理化を図るとともに兼業化、高齢化に対応するために集落営農を定着させることにより農業の振興と地域活性化に資することを目的として、平成８年度から長崎県県北の松浦市、北松浦郡田平町・同江迎町・同鹿町町・同小佐々町・同佐々町・同吉井町の１市６町で面積610haの国営農地再編整備事業に取組むことになった。このため松浦市教育委員会では長崎県教育委員会に協力を得て九州農政局と埋蔵文化財についての協議に入った。協議の結果、まず松浦市内における国営農地再編整備事業予定地区内の遺跡の分布調査を平成６年７月18日から７月20日に実施した。その分布調査の結果、確認調査が必要な遺跡として牟田Ａ・牟田Ｂ・水尻Ｂ・蕨川・下谷・田口高野・大石Ｂ遺跡があった。周知の遺跡はないが今福・調川・川内の３ヵ所において試掘調査が必要である旨を九州農政局へ回答した。協議の結果、平成７年度から３ヵ年計画で今後の協議に必要な基礎資料を得ることを目的に確認調査及び試掘調査を行った。その調査費については国庫補助・県費補助を受けて、松浦市教育委員会が主体となって実施することになった。なお、大石Ｂ遺跡については地元との協議の中で事業計画地より除外されている。

平成８年４月には、九州農政局が北松浦郡吉井町に移転し、北松農地整備事業所（以下「事業所」という。）が開設され、以降の協議は事業所と行うことになった。

川内工区の計画地23.3haの工事予定地区内には周知の遺跡はなかったが、立地環境から地区内の遺跡の有無を確認するための試掘調査を平成８年５月13日から５月23日までの期間行った。その結果、約3,300㎡の範囲に縄文時代から中世にかけての遺物包含層が確認されたため、文化財保護法に基づく第57条の６の遺跡発見届を行うとともに事業所と協議に入った。数回に及ぶ協議の結果、約3,300㎡の遺跡の範囲のうち工事の計画が変更できない１号支線道路部分の193㎡の発掘調査を実施することになった。発掘調査費用については、平成10年４月１日付けで事業所長と松浦市長との間で小船遺跡の発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査負担契約を締結し、発掘調査に向けての諸準備に取りかかった。

発掘調査は、工事計画の図面の作成が大幅に遅れたため、平成11年１月26日から開始して、調査が終了したのは３月17日であった。

2．調査関係者　（敬　称　略）

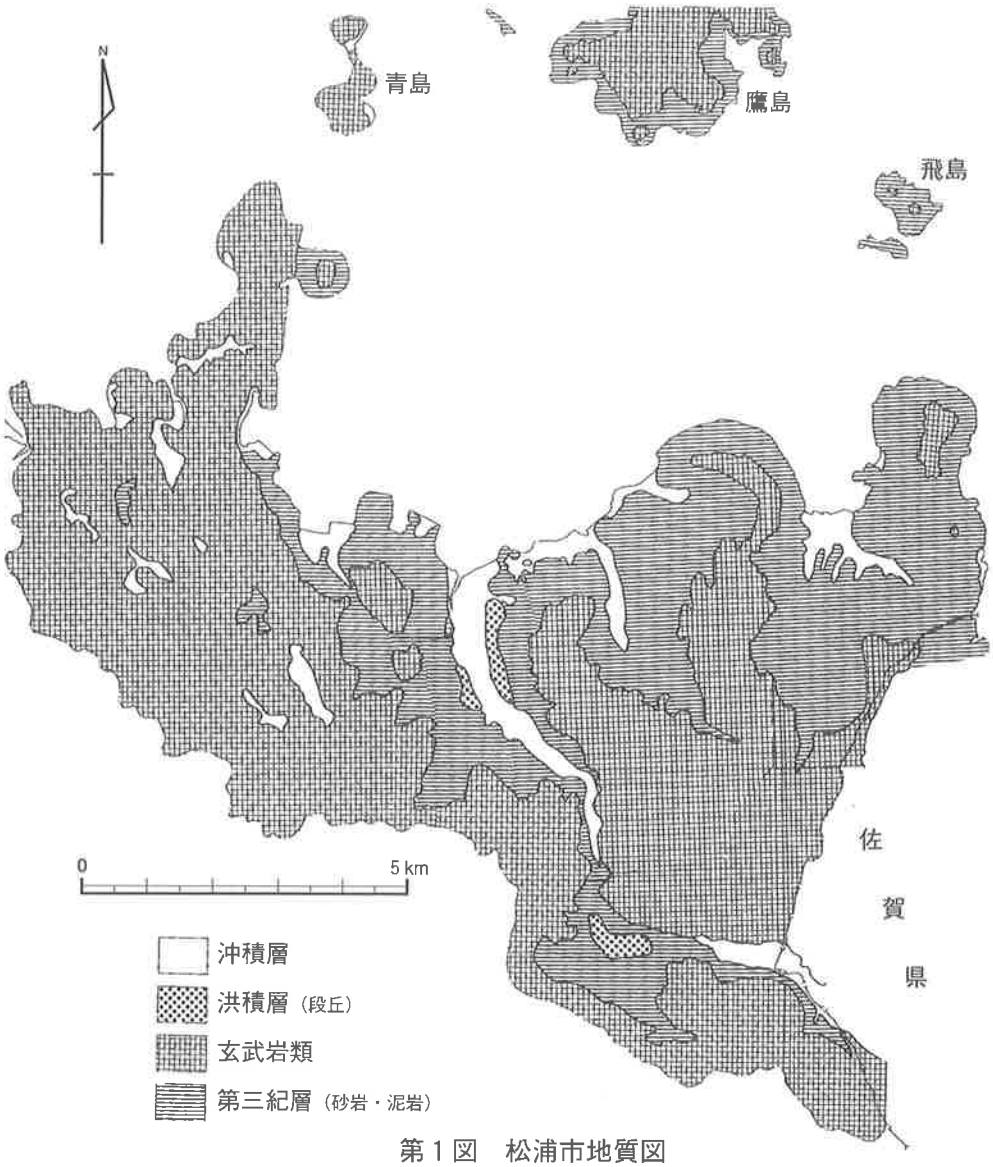
調査主体	松浦市教育委員会	
調査総括	黒川壽信	（教育長）
	久家幸雄	（教育次長）
事務局	川上啓一	（生涯学習課課長）
庶務担当	宮本正志	（生涯学習課次長兼生涯学習係長　平成１０年４月から）
	和田光正	（生涯学習課次長兼生涯学習係長　平成１１年４月から）
	田畑徹二	（生涯学習課主事）
調査担当	中田敦之	（生涯学習課主査兼社会教育主事）
	高原　愛	（生涯学習課文化財調査員　平成１１年３月まで）
	明石拡子	（生涯学習課文化財調査員　平成１１年３月まで）
整理担当	中田敦之	（生涯学習課主査兼社会教育主事）
	明石拡子	（生涯学習課主事）
調査協力者	徳田慶作・山下智輝・浜野今朝男・朝永真喜・吉永惣一・原口正之・関本朝子・山口民子・白石チヨノ・松本綾子・竹本麗子・村田政子・岡村ヒサノ・辻礼子・吉田未千子・吉永アヤカ・前田チヨノ・徳田タマ子・松田マサヨ・黒田ヒサエ・松永セツエ・天久保正子・里森知恵子・冨野トシエ・辻元エン・藤村留美子・今田英子・原口道子・池田トキ子 岩本七重・宮﨑朝美・吉野貴子 平田惠・藤村誠男・山口末広	

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第１図）

長崎県本土の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。松浦市の北には元寇の島で有名な北松浦郡鷹島町があり、西の北松浦郡田平町には西の登呂遺跡といわれ多くの木製品が出土した里田原遺跡がある。南の北松浦郡吉井町には縄文草創期の隆起線文土器が出土した福井洞窟がある。また、東は有田焼の積出港で有名な佐賀県伊万里市と接している。このように松浦市の近郊は日本の歴史上においても重要な地域であり、中国大陸・朝鮮半島とも近いという地理条件からも旧石器時代から中世期にかけての遺跡の宝庫でもある。

松浦市の地質は、第三紀層を基盤として、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造を呈している。



第１図　松浦市地質図

この玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので、典型的な溶岩台地を形成している。かつては伊万里市南方を中心として噴出した火山であったと思われている。したがって、佐賀県境を占拠する標高 777 m の国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。この台地が形成されたのは八百万年以前の新第三紀の火山活動で、粘性の低い溶岩が盾状に広がった結果による。

松浦市の地勢は、南高北低をなし、河川もすべて北流している。市の南側には400～500 m 級の高位台地があり、悪太郎川以西では 100 m 以下の低位台地が広がっている。市西部の星鹿半島の先端の津崎鼻や西田地区の波津崎には、長い年月の風化作用より海岸線を急峻に切り立たせた玄武岩の柱状節理の海食崖が発達している。この玄武岩が基盤になっているが、長い年月の侵食による地形の変化が著しく、現在の山頂部や山裾に溶岩流の一端を見ることができる。この玄武岩は節理の間に滞水しやすく、地辷り災害の原因にもなっているが、一面では湧水が豊富で溜池に利用されているところも多い。湧水のあるところは、古くより人と動物の暮らしに大きく係ってきている。

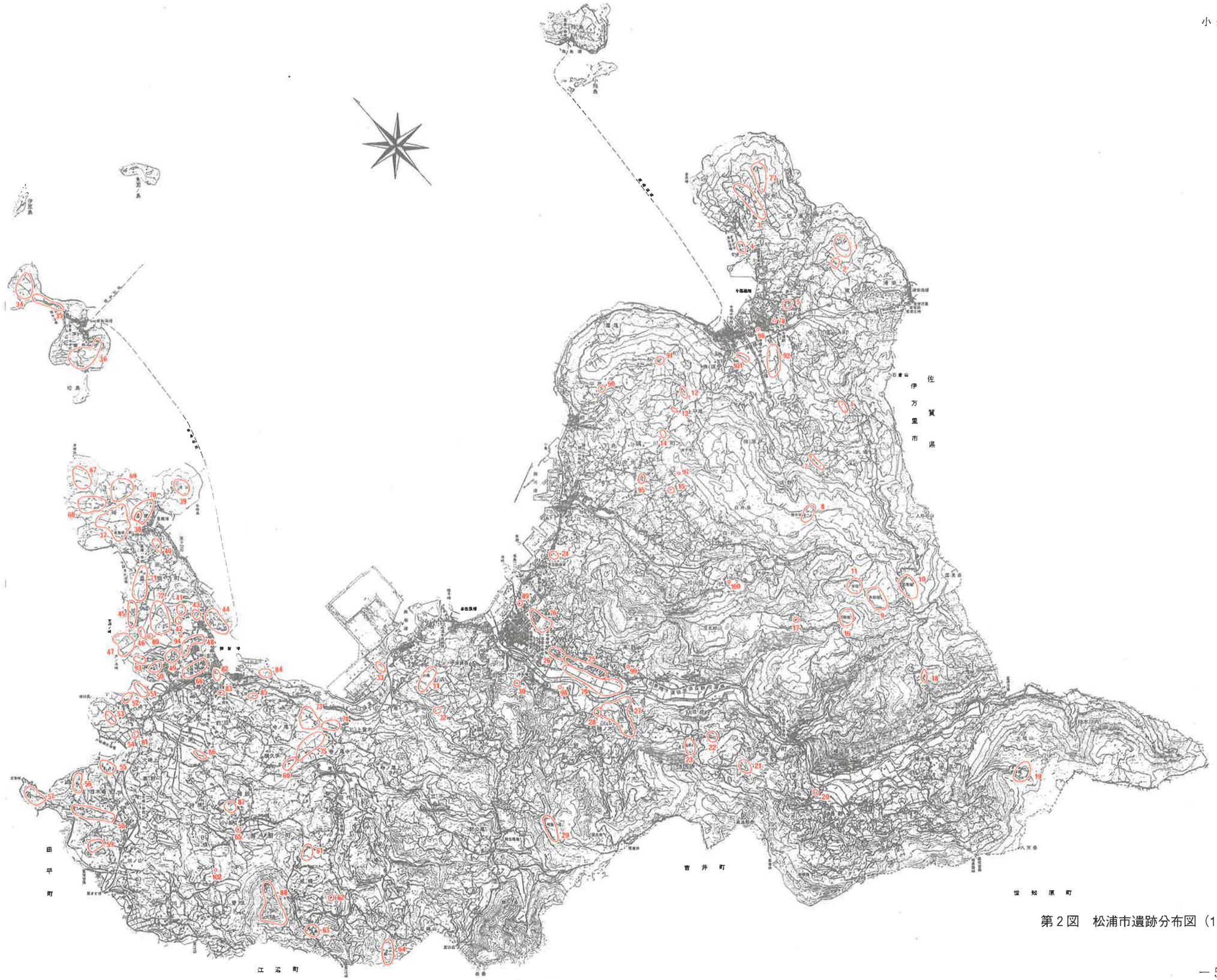
今回調査を行った小船遺跡がある市の西部一帯は、玄武岩が不整合に覆っていたる所に玄武岩台地を形成している。この台地は・竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位台地となっている。中央部を流れる竜尾川は、吉井・江迎町境の白岳山麓に源を発し、木場川・田代川などの支流を集めて、低位台地を刻んで北へ流れている。河口には三角洲がほとんどつくられずラッパ状に開いた三角江となっている。

2．歴史的環境（第２図）

松浦市では、人類の出現を物語る痕跡は早くから認められ、後期旧石器時代の遺物散布地は約40箇所にも及んでいる。その機種もナイフ形石器・剥片尖頭器・彫器・掻器・削器等多様で、西北九州特有の台形石器もこれに加わる。このような背景には、牟田の台地に産出する黒曜石及び腰岳の山麓に産出する黒曜石を容易に入手できる地理的要因があった。

松浦市内の遺跡としては、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多い。特に小船遺跡の周辺は市内でも特に遺跡の多い地域として注目されている。現在までのところ、後期旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田Ａ・Ｂ・Ｃ、中ノ崎・長蔵坊・田口高野遺跡などで確認されている。さらに、平成２年度の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う寺ノ尾Ｃ遺跡の確認調査ではナイフ形石器・台形石器の良好な包含層が検出されている。星鹿半島一帯は、道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地であるが、これまでの確認調査では良好な包含層の発見までには至っていない。

次の縄文時代では、姫神社遺跡・小嶋遺跡など良好な遺跡も知られている。姫神社遺跡は、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤、吉崎昌一ら）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告されている。この論文については福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって翻訳されている。同論文では縄文前期の轟式土器、曽畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などが報告されている。また、この姫神社遺跡からは萩原博文・久原巻二氏によって縄文後期の土器片と共に石鋸・サイドブレイドが採集され



第２図　松浦市遺跡分布図（1／50000）

表1　松浦市遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	備考
1	松浦党梶谷城跡	今福町東免城山	輸入陶磁器、古唐津、銅銭、石鏃等	平成３～６年度確認調査
2	城山山麓遺跡	〃　東免農園	石鏃、剥片	
3	満場遺跡	〃　北免上満場・平ほか	ナイフ形石器、台形石器、掻器、剥片	昭和56年度確認調査
4	ぎぎが浜遺跡	〃　北免前田・黒崎ほか	須恵器	
5	山川遺跡	〃　東免山川	剥片	
6	長尾池遺跡	〃　木場免長尾･寺上免道山	石鏃、剥片	
7	深田代池遺跡	〃　寺上免方立・抜ケ	剥片	
8	椎ノ木谷遺跡	〃　坂野免椎木谷	台形石器、剥片	
9	牟田池遺跡	〃　木場免牟田	ナイフ形石器、石鏃、剥片	
10	葛籠池遺跡	〃　木場免札ノ辻・葛籠	石鏃、剥片	
11	湯ノ谷池遺跡	調川町松山田免湯谷	ナイフ形石器、石鏃、石核、剥片、押型文土器、並木式土器	
12	柳池遺跡	〃　平尾免柳・堀ノ元	ナイフ形石器、スクレイパー、剥片	
13	南久保遺跡	〃　平尾免雨久保	剥片	
14	櫨川遺跡	〃　平尾免古番所	剥片	
15	松園屋敷跡	〃　上免里		
16	川頭池遺跡	志佐町赤木免河頭・文明ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、磨製石斧、スクレイパー、剥片	
17	石盛山古墳	〃　赤木免石盛		
18	絶頂池遺跡	〃　田ノ平免小谷・谷	石鏃、剥片	
19	柳原池遺跡	〃　稗木場免仙須計	掻器、剥片	
20	黒岩岩陰遺跡	〃　横辺田免池ノ元	土器片	
21	モウデ池遺跡	〃　池成免庵ノ本	石鏃、剥片	
22	矢櫃池遺跡	〃　池成免池成	石鏃、剥片	
23	池成池遺跡	〃　池成免橋本・曽井	剥片	
24	寺田遺跡	〃　浦免寺田	スクレイパー、剥片	
25	久保園遺跡	〃　里免久保園・高野免松山ほか	石鏃、剥片、弥生土器、輸入陶磁器	平成７年度確認調査
26	陣ノ内遺跡	〃　里免陣ノ内	石鏃、剥片、弥生土器、輸入陶磁器、石鍋、土師器	平成10年度確認調査
27	栢ノ木遺跡	〃　栢木免小久保ほか	青銅鏡片、管玉、ビーズ玉、石庖丁、弥生土器、輸入陶磁器、土師器、石鍋	第10次まで確認・本調査
28	堂山古墳	〃　栢木免高尾本		
29	明賀谷遺跡	〃　栢木免明賀谷	ナイフ形石器、台形石器、石斧、石匙	
30	大嶋遺跡	〃　庄野免小楠	経筒（滑石製、円筒形）	
31	大堤遺跡	〃　白浜免猿喰・山頭	剥片	
32	皿山窯跡	〃　白浜免京地	磁器、トチン、ハマ、ナンキン	昭和55年度本調査
33	楼楷田遺跡	〃　白浜免楼楷田･日前ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器、石斧、須恵器、土師器、石鍋、輸入陶磁器	昭和57～59年度本調査
34	段ノ上遺跡	星鹿町青島免段ノ上	台形石器、須恵器、剥片、黒曜石原石	
35	一町田遺跡	〃　青島免崎田・中ノ島	弥生土器、須恵器、剥片	
36	青島遺跡	〃　青島免長久保･牛久保ほか	台形石器、ナイフ形石器、石鏃、剥片	
37	大石Ａ遺跡	〃　岳崎免追出･堤田ほか	黒曜石原石	
38	千人塚	〃　岳崎免大堂･丸久保ほか		
39	刈萱城跡	〃　岳崎免岳崎	ナイフ形石器、台形石器、剥片	平成元･3･6年度確認調査
40	下田遺跡	〃　下田免山口	ナイフ形石器、台形石器、凹石、彫器、土師器、黒曜石原石	昭和61年度確認調査
41	北久保Ａ遺跡	〃　北久保免勢ノ巣･藤園	石鏃、弥生土器、剥片、黒曜石原石	
42	北久保Ｂ遺跡	〃　北久保免浦頭	剥片、黒曜石原石	
43	北久保Ｃ遺跡	〃　北久保免浦頭	石鏃、剥片、黒曜石原石	
44	姫神社遺跡	〃　北久保免宮崎･玄道寺	ナイフ形石器、曽畑式土器、石斧、石鏃、石錐、弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器	昭和40･平成4･7･8･10年度確認調査
45	牟田Ａ遺跡	〃　牟田免中尾	ナイフ形石器、石鏃、剥片、黒曜石原石	平成９年度確認調査
46	牟田池上遺跡	〃　牟田免池上	石核、石鏃、剥片、黒曜石原石	昭和58年度確認調査
47	佐世保崎遺跡	〃　牟田免佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、黒曜石原石	昭和57年度本調査
48	池田遺跡	御厨町池田免田崎･里免下長峯	夜臼式土器、弥生土器、石斧、石鏃、石匙、輸入陶磁器、獣骨、骨角器	昭和63･平成元年度確認調査
49	長蔵坊遺跡	〃　池田免長蔵坊･西ノ原ほか	ナイフ形石器、ラウンドスクレイパー、黒曜石原石	
50	中ノ崎遺跡	〃　池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	
51	水尻Ａ遺跡	〃　大崎免水尻・雀崎	黒曜石原石	
52	水尻Ｂ遺跡	〃　大崎免水尻外	ナイフ形石器、石斧、スクレイパー、剥片、黒曜石原石	平成８年度確認調査
53	蕨川遺跡	〃　大崎免俵場･フウチンほか	剥片、黒曜石原石	平成８年度確認調査
54	小嶋古墳群	〃　大崎免小嶋	銀環、勾玉、丸玉、鉄鏃、阿高式土器、石鋸、石鉞	昭和62年度確認調査
55	下谷遺跡	〃　西木場免下谷・平原	石鏃、剥片鏃、スクレイパー、阿高式土器、弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器	平成８年度確認調査
56	田中遺跡	〃　西田免小田･田尻ほか	スクレイパー、剥片	
57	波津崎遺跡	〃　西田免波津崎	ナイフ形石器、剥片	
58	田口高野遺跡	〃　西田免田口高野ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片	平成８年度確認調査
59	西木場遺跡	〃　西田免潮入ほか	剥片	
60	横久保遺跡	〃　横久保免大久保	剥片、弥生土器	

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	備考
61	田川遺跡	御厨町田代免田川・前田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片鏃、つまみ形石器、石斧、阿高式土器、輸入陶磁器	平成６～７年度本調査
62	板橋経塚	〃　板橋免教塚		
63	板橋境目遺跡	〃　板橋免堺目・ケンケイ田	ナイフ形石器、石鏃、剥片	
64	アカニタ池遺跡	〃　板橋免アカニタ	ナイフ形石器、縄文土器、剥片	
65	葉山六地蔵	〃　小船免葉山		
66	坂本遺跡	〃　里免丸田・長峯	石鏃、黒曜石原石	
67	津崎鼻遺跡	星鹿町岳崎免津崎ほか	ナイフ形石器、台形石器、彫器、掻器、石鏃、石刃、石刃核、黒曜石原石	
68	津崎遺跡	〃　岳崎免吸田・天堤ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片	
69	大石Ｂ遺跡	〃　岳崎免園田・久保田ほか	細石核、石鏃	
70	大石Ｃ遺跡	〃　岳崎免堤田ほか	ナイフ形石器、石鏃、石核	
71	牟田Ｂ遺跡	〃　牟田免細・久保ほか	ナイフ形石器、石鏃、剥片、黒曜石原石	平成９年度確認調査
72	牟田Ｃ遺跡	〃　北久保免藤園・不動ほか	ナイフ形石器、台形石器、細石核、細石刃、掻器、石鏃、黒曜石原石	
73	寺ノ尾Ａ遺跡	御厨町上登木免大野谷	ナイフ形石器、台形石器、細石核、石核、石鏃、掻器、黒曜石原石	
74	寺ノ尾Ｂ遺跡	〃　上登木免野中田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器、石刃、石核	
75	寺ノ尾Ｃ遺跡	〃　横久保免天久保ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石槍、掻器、細石核、弥生土器	平成元・4・6・10年度確認調査
76	辻ノ尾遺跡	志佐町浦免辻ノ尾ほか	細石核、細石刃、石鏃、剥片	昭和63年度確認調査
77	北平遺跡	今福町北免北平	石鏃、剥片	
78	文禄の役松浦家供養塔	〃　東免390番地	自然石板碑の供養塔、五輪塔、長明塔	
79	宮ノ下リ遺跡	志佐町高野免宮ノ下リほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石槍、弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、輸入陶磁器等	昭和60～63年度調査
80	北久保経塚	星鹿町北久保免竿	弥生土器、剥片	
81	小嶋遺跡	御厨町大崎免小嶋	阿高式土器、石斧、石鏃、石鋸	昭和61年確認調査
82	御厨城跡	〃　里免大久馬川		
83	御厨館跡	〃　里免館		
84	向山館跡	〃　里免坊ノ上		
85	中野遺跡	〃　中野免中野	ナイフ形石器、台形石器、彫刻刀形石器	
86	田原遺跡	〃　田原免田原ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石匙、弥生土器、須恵器、土師器、近世人骨	平成元年度確認・2年度本調査
87	城ノ越城跡	〃　小船免栗山		
88	大岳古墨	〃　板橋免大岳		
89	淀姫神社古墳	志佐町浦免宮前		
90	平尾遺跡	調川町平尾免芦原		
91	大塔遺跡	〃　平尾免大塔		
92	中ノ瀬遺跡	今福町浦免中ノ瀬・田川原ほか	石鏃、剥片、弥生土器、土師器、瓦器、輸入陶磁器	平成７年度確認調査
93	戸ノ本崎遺跡	星鹿町牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃	
94	貴船神社古墳	〃　北久保免浦頭	須恵器、土師器	
95	古園遺跡	調川町下免古園		
96	今福小学校遺跡	今福町浦免宮崎	剥片、弥生土器	
97	宮司の六地蔵塔	調川町上免宮司		
98	庄野の六地蔵塔	志佐町庄野免島田		
99	高野の六地蔵塔	〃　高野免堤田		
100	松山田の六地蔵塔	調川町松山田免平原		
101	今福遺跡	今福町仏坂免五百田ほか	石鏃、弥生土器、土師器等	平成7年度試掘・8年度本調査
102	小船遺跡	御厨町山根免広久保	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片、輸入陶磁器	平成8年度試掘・10年度本調査

ている。小嶋遺跡は、昭和61年に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器もある。石器では石鏃・剥片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などが出土している。平成６・７年度には竜尾川地区県営圃場整備事業に伴い実施した田川遺跡の発掘調査では、縄文中期終末から後期初頭頃の坂の下式土器とともに多数の剥片鏃・つまみ形石器・石錐・石鋸・サイドブレイド等が出土している。

弥生時代では、大正14年に発見され、現在は長崎県の重要遺跡として周知されている池田遺跡がある。この遺跡は、昭和63年から平成元年にかけて４次にわたる確認調査が行われている。その結果、縄文晩期から弥生前期にかけての良好な包含層が検出されており、柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓・土壙等の遺構と西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器・骨製ヤス・貝輪等の遺物が出土している。その他では平成２年の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う田原遺跡の調査で弥生後期を中心とする良好な包含層が検出されている。

古墳時代については、従来からよく知られていなかったが、昭和62年に確認調査を実施した小嶋古墳群がある。３基を確認し、そのうちの１号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、７世紀代に比定できる資料である。

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で、寛治３年（1089）８月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の、康和４年（1101）８月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書の疑いが指摘されている史料でもある。この史料には「宇野御厨野検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれている人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、土着したといわれている人物で、以後の松浦党の諸氏は源久を祖として仰いでいる。松浦党は宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源性一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団であったと思われ、西北九州で絶大なる影響力を持つようになる。松浦党は、玄界灘を熟知した航海術で盛んに公益活動を行い、大陸まででかけて交易するようになっている。

御厨に関しては、『河上神社文書』の正応５年（1292）の「肥前国河上宮造営用途支配懇田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と御厨の公田数が記されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、これらの史料から考えると、現在の五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯・南松浦郡の地域からと伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。御厨の地名は鎌倉期から御厨荘などとして現われているが、これは宇野御厨を指し、現在の御厨には直接につながらない。しかし、鎌倉期には、「御厨熊徳」なる人物が見え、引安４年（1281）に宇野御厨の預所から無主の荒野一町を給田として与えられており、すでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。御厨氏は、「御厨氏系図」によれば、値嘉十郎連の子御厨小二郎並が始祖とされている。代々御厨を姓として、

御厨城を居城としていた。

南北朝から室町期には、松浦党はしばしば一揆を結んで、地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳4年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には「〈ミくりや〉三河守守」、「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする領主名が見える。さらに嘉慶2年（1388）の『青方文書』の一揆契諾状には「御厨三河守守」「御厨田代近」の名が見える。この「御厨田代近」は、田川遺跡の位置する田代地区を本拠地とする領主と思われる。朝鮮貿易では、『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗8年（1408）6月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』に「下松浦三栗野太守源満」「下松浦三河守融」などの名が見える。また、『海東諸国紀』にも「下松浦三栗野太守源満」の名が見える。

戦国期に入ると、田平里城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、昌は島原の有馬貴純と結び、一方、弘定は大内義弘の援けを得て、延徳3年（1491）に平戸勝尾嶽城や箕坪城をめぐって激しい攻防を展開したが、結局大内氏の斡旋で和睦した。この結果、弘定の室の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われ、川棚に走る。その後の御厨は平戸領に吸収されてしまうようである。

注1　下川達彌　「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」　『長崎県北松浦地方の文化』長崎県立美術博物館　1984

注2　中田敦之　『田原積石塚・寺ノ尾C遺跡』松浦市文化財調査報告第7集　松浦市教育委員会　1990

注3　ALBERT MOHR and MASAKAZU YOSHIZAKI　「Cultural Sequence in Western Kyushu」『Asian Perspectives』XVI（2）　1973

注4　水ノ江和同　「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』22　1990

注5　萩原博文・久原巻二　「九州西北部の石鋸、サイドブレイドについて」　『古代文化27－4』1975

注6　中田敦之　『小嶋古墳群』松浦市文化財調査報告第4集　松浦市教育委員会　1988

注7　中田敦之　『田川遺跡』松浦市文化財調査報告第12集　松浦市教育委員会　1997

注8　前田　毅　「肥前御厨貝塚発見報告」　『人類学雑誌40－10』　1925

注9　中田敦之　『池田遺跡』松浦市文化財調査報告第6集　松浦市教育委員会　1990

注10　中田敦之　『田原遺跡』松浦市文化財調査報告第10集　松浦市教育委員会　1991

参考文献

1．角川日本地名辞典編纂委員会　『角川日本地名辞典』－42長崎県－　角川書店　1987

2．長崎県史編纂委員会　『長崎県史』－古代中世編－ 1980

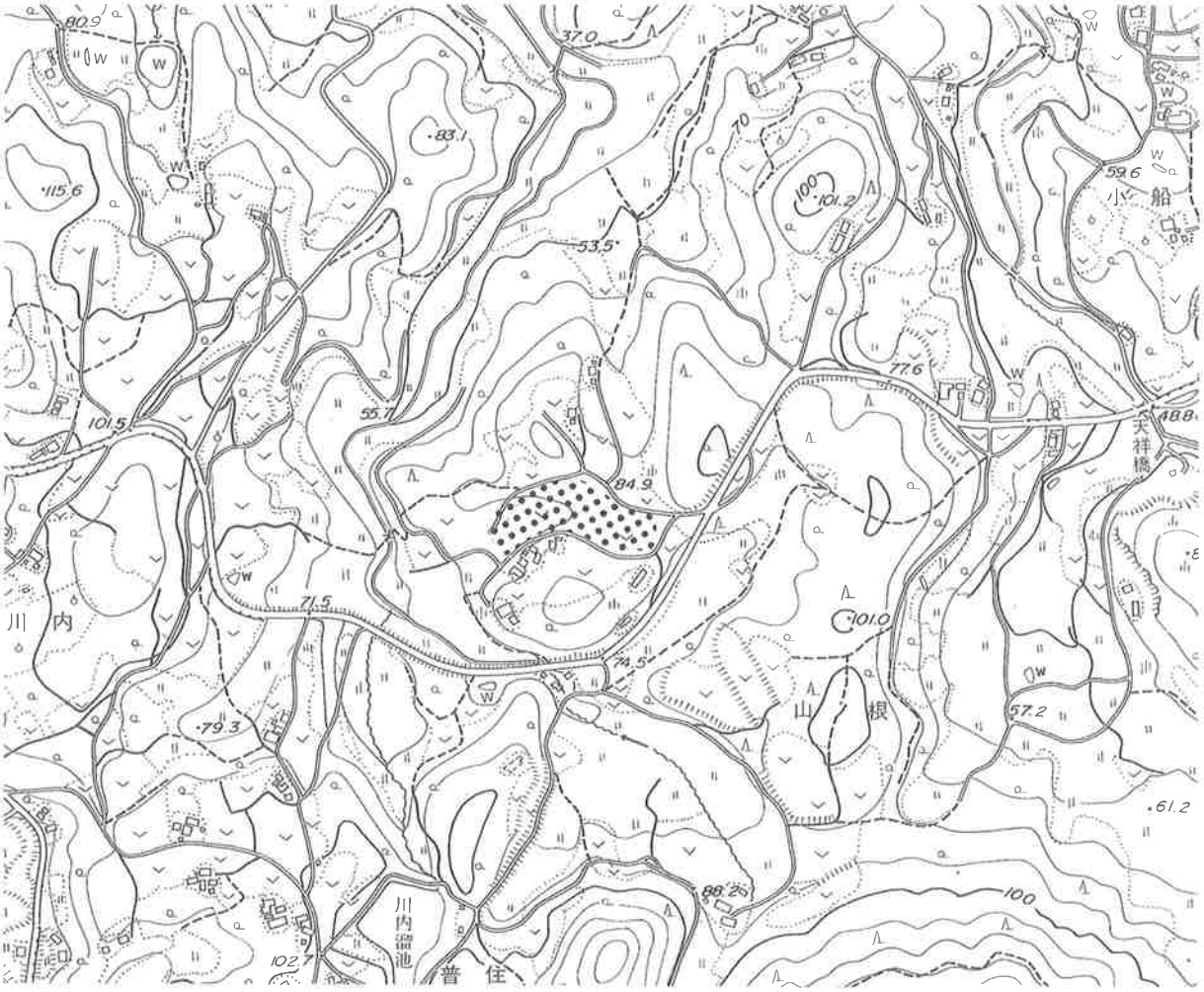
3．試掘調査（第３図～第６図）

九州農政局が事業主体で、松浦市で国営農地再編整備事業が計画されている川内工区は、市の西部、丘陵上の畑地に位置し、遺跡の南側には大岳がそびえており、周辺には旧石器・縄文などの遺跡の存在は確認されていなかった。

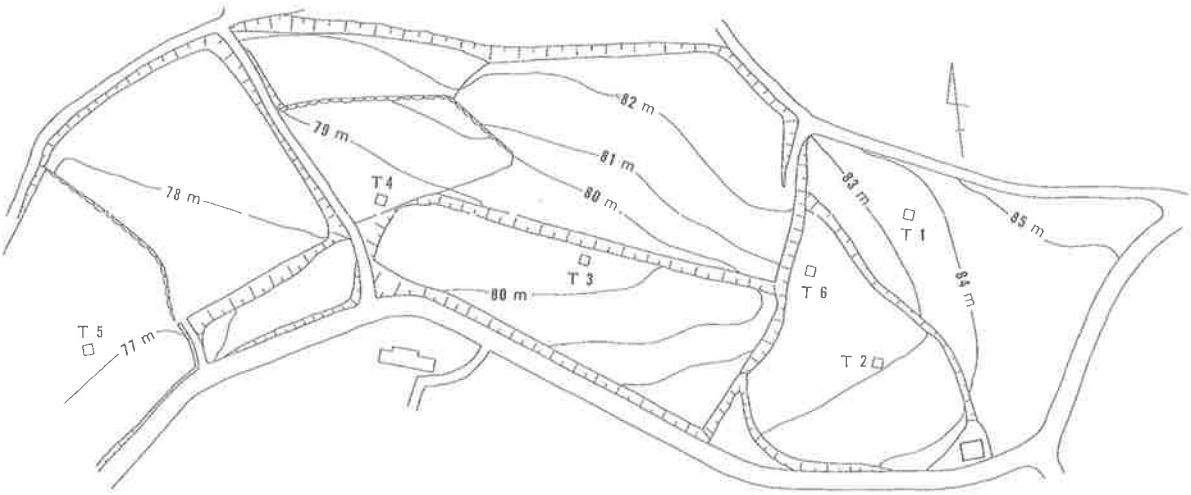
工区内には周知の遺跡はなかったが、平成６年度に実施した長崎県教育委員会と松浦市教育委員会の分布調査で、当該地の試掘調査が必要であると回答していた。九州農政局と松浦市教育委員会では、数度にわたる協議を重ねた結果、平成８年度に遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。

小船遺跡の試掘調査は、土地所有者の協力を受けて、畑地の作物を作る合間をぬって、平成８年５月13日から５月23日までの11日間国庫補助・県費補助の一環として実施した。調査では、畑地と休耕地に２ｍ×２ｍのトレンチを試掘調査予定地の東側から西側に６ヵ所設定し、24㎡を調査した。

この調査の結果、Ｔ３区からＴ５区では、耕作土の下が一部撹乱を受けていたが、Ｔ４区３層から集石遺構を１基検出した。礫の大きさは拳大から25cm程のものまであったが、掘り込みももたず、性格・用途などについても不明である。



第３図　小船遺跡位置図（１／10000）



第４図　試掘調査区設定図（１／1500）

出土遺物では、全体的に遺物の量は少なく76点であった。

１は細身のナイフ形石器で、黒色黒曜石の縦長剥片を利用し、二側縁加工は主要剥離面から行われている。刃部を欠損している。Ｔ１－Ⅱ層出土。全長2.5cm、最大幅1.1cm、厚さ0.35cmを計る。

２は安山岩製の台形石器である。主要剥離面まで平坦剥離が施され、撥状に仕上げている。側縁から剥離調整を行ったあとにブランティング加工を施している。Ｔ６－Ⅳ層出土。全長4.6cm、最大幅2.8cm、厚さ1.05cmを計る。

３～５は石鏃である。３はＴ２－耕作土出土。全長2.2cm、最大幅1.45cm、厚さ0.45cmを計る。４はＴ３－耕作土出土。全長2.85cm、最大幅1.65cm、厚さ0.55cmを計る。５はＴ３－耕作土出土。全長2.1cm、最大幅1.25cm、厚さ0.4cmを計る。

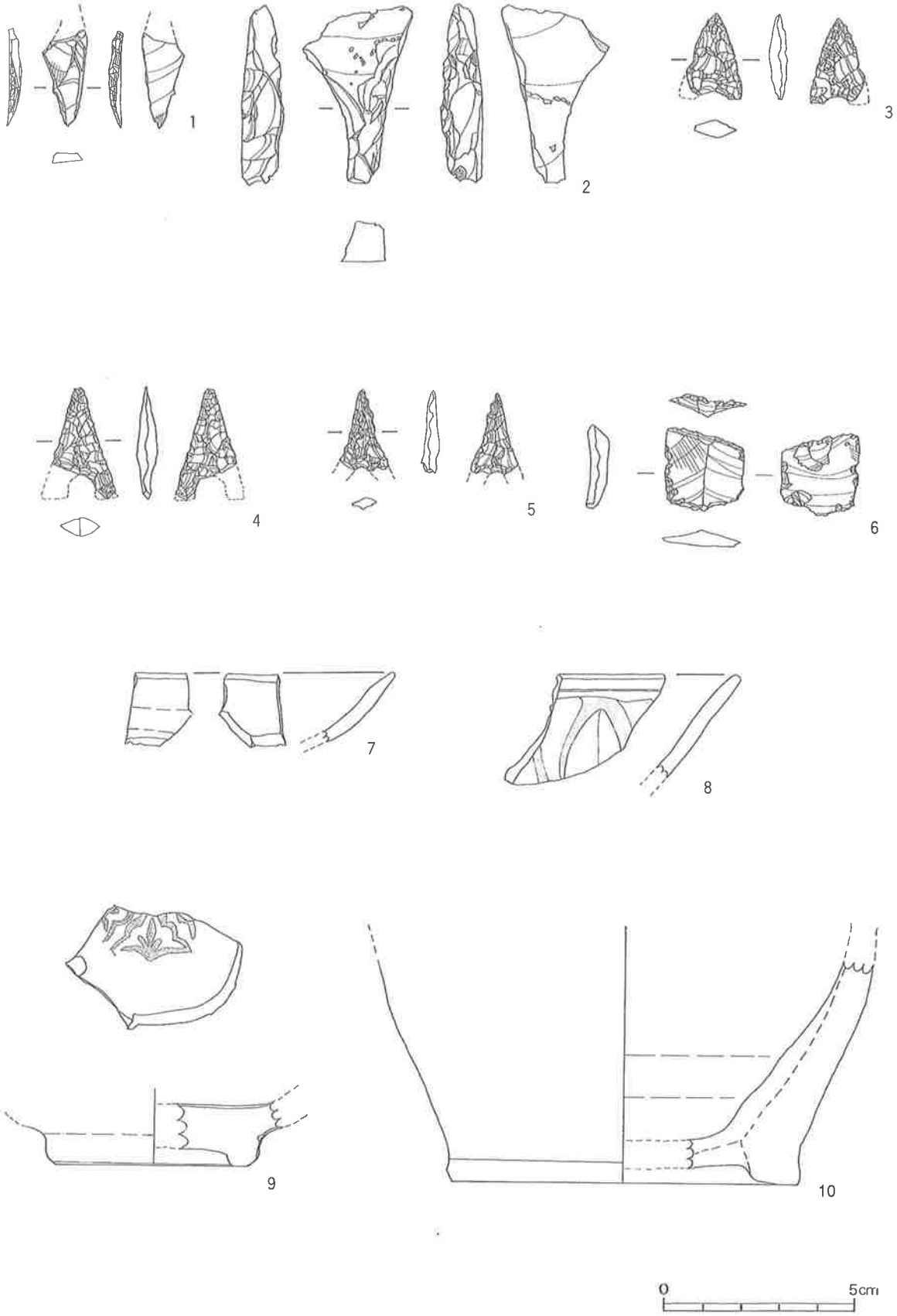
６は使用痕ある剥片で、打面部分にブランティング加工がみられ、左側縁を刃部とする台形石器と思われるが、主要剥離面上部と下部と右側縁に加工痕がみられるため、転用したものと思われる。Ｔ３－排土。全長2.15cm、最大幅2.05cm、厚さ0.55cmを計る。

７～９は中国産輸入陶磁器で、７は白磁の口禿げのⅨ類の皿である。Ｔ５－４出土。灰白色の釉で胎土も灰白色である。８は龍泉窯系鎬連弁文青磁碗の口縁部でＴ５－２出土。釉は淡緑灰色で、胎土は灰白色である。９は龍泉窯系青磁碗で内面見込みに花スタンプしてあり、高台畳付の釉は掻き取られている。底径4.9cmを計る。釉は淡緑色で、胎土は灰色である。

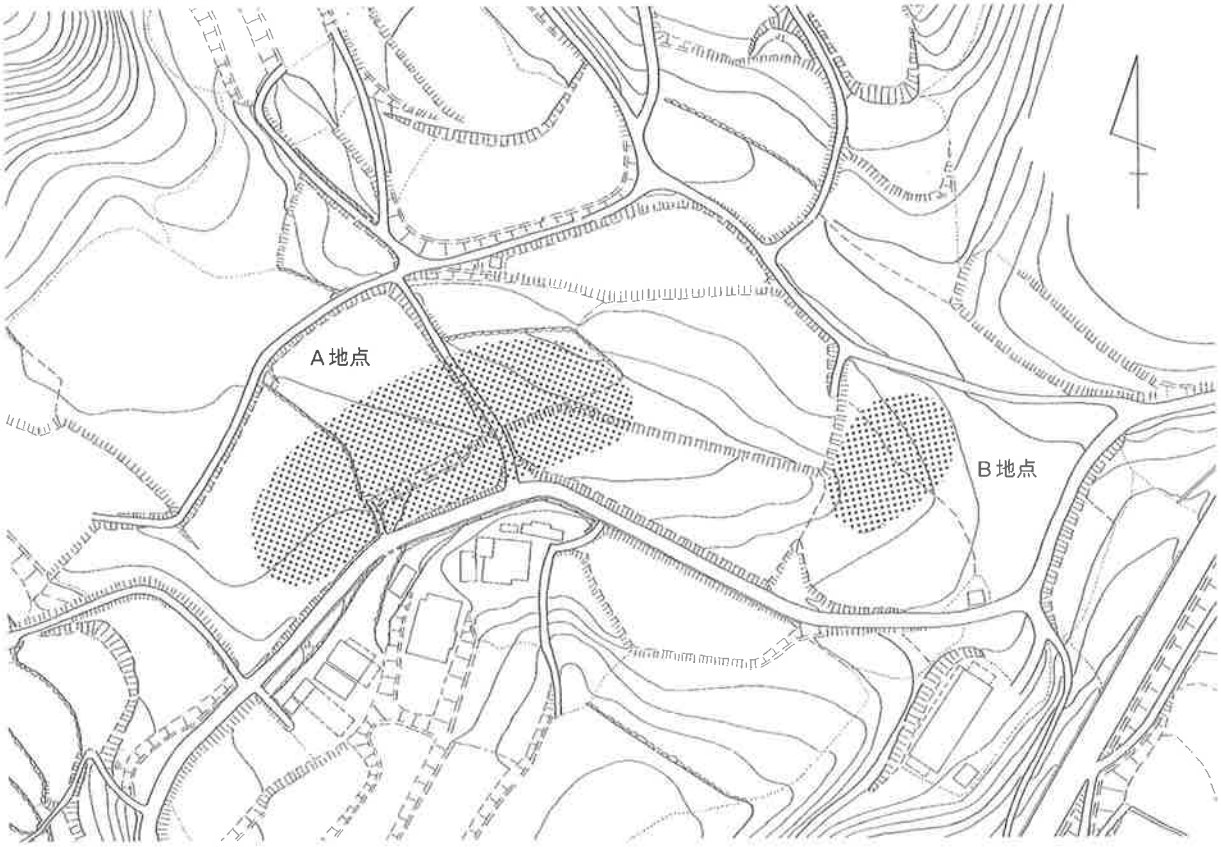
10は国内産の陶器の壺と思われる。高台は幅広く、内・外面ともに褐色で塗色を呈している。生産地は不明である。底径8.9cmを計る。高台には施釉なし、釉は暗灰茶褐色で、胎土は灰黄色である。

参考文献

中田敦之　『松浦市内遺跡確認調査（２）』　松浦市文化財調査報告書第13集　松浦市教育委員会　1998



第５図　試掘調査出土遺物（２／３）



第6図　小船遺跡範囲図（1／2000）

この試掘調査で、御厨町山根免の工事予定地区内の2箇所に遺跡が分布していることがわかった。A地点は、弥生から中世期にかけての包含層で約2,700㎡、B地点は旧石器時代の包含層と思われ、約600㎡の合計約3,300㎡に遺跡が確認されたため市教育委員会では、文化財保護法に基づく第57条の6の遺跡発見届を行うとともに、この調査結果を九州農政局北松農地整備事業所に報告するとともに遺跡の保護について協議を開始した。協議では、お互いの立場を尊重して事業を推進していくことに重点がおかれ、事業所も埋蔵文化財の保護には極力留意しながら、その保存について詳細に検討して設計を進めてゆくこととなった。

第Ⅲ章　遺跡の調査

1．調査の概要（第７図）

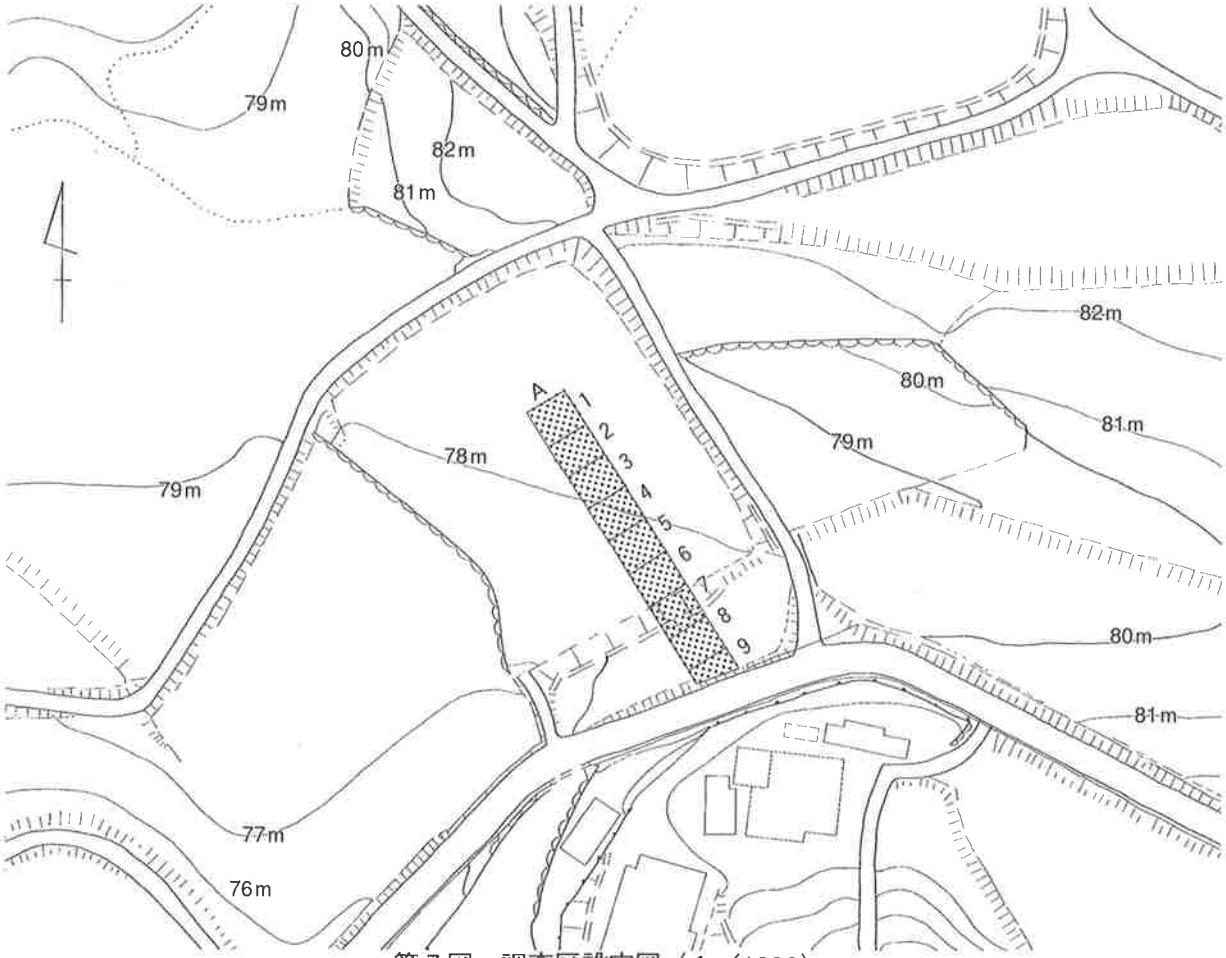
発掘調査は、調査区内の作物の取り入れと、簡易プレハブ・簡易トイレの設置が終了した平成11年１月26日から３月17日までの期間行った。

調査期間内における記録措置として、土層堆積状況及び遺構の検出状況の写真撮影・実測図の作成を行った。写真撮影は、35ミリ判モノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。実測図については、土層図及び遺構図・遺物分布図とも１／20で作成した。

調査区の設定は、事業所に依頼して１号支線道路に係る部分の基準杭を打っていただいていたため、これを利用した。調査区は５ｍ×５ｍの25㎡を基準に、調査区の番号は北から南へＡ１～Ａ９区と呼ぶようにした。最終的に調査した面積は193㎡であった。

出土した遺物については、耕作土とⅡ層は同一土層内で出土した遺物として一括遺物として取り上げた。Ⅱ’～Ⅳ層から出土した遺物については、平板測量でその位置を記録した。土層については、堆積状況を把握するため各調査区の北壁・西壁で確認することとした。Ａ１区北壁では、植物珪酸体分析のための土壌サンプリングを行った。その結果については第Ⅳ章に記載した。

調査区の全体の掘り下げは、人力によったが、調査終了後の埋め戻しは重機を利用した。

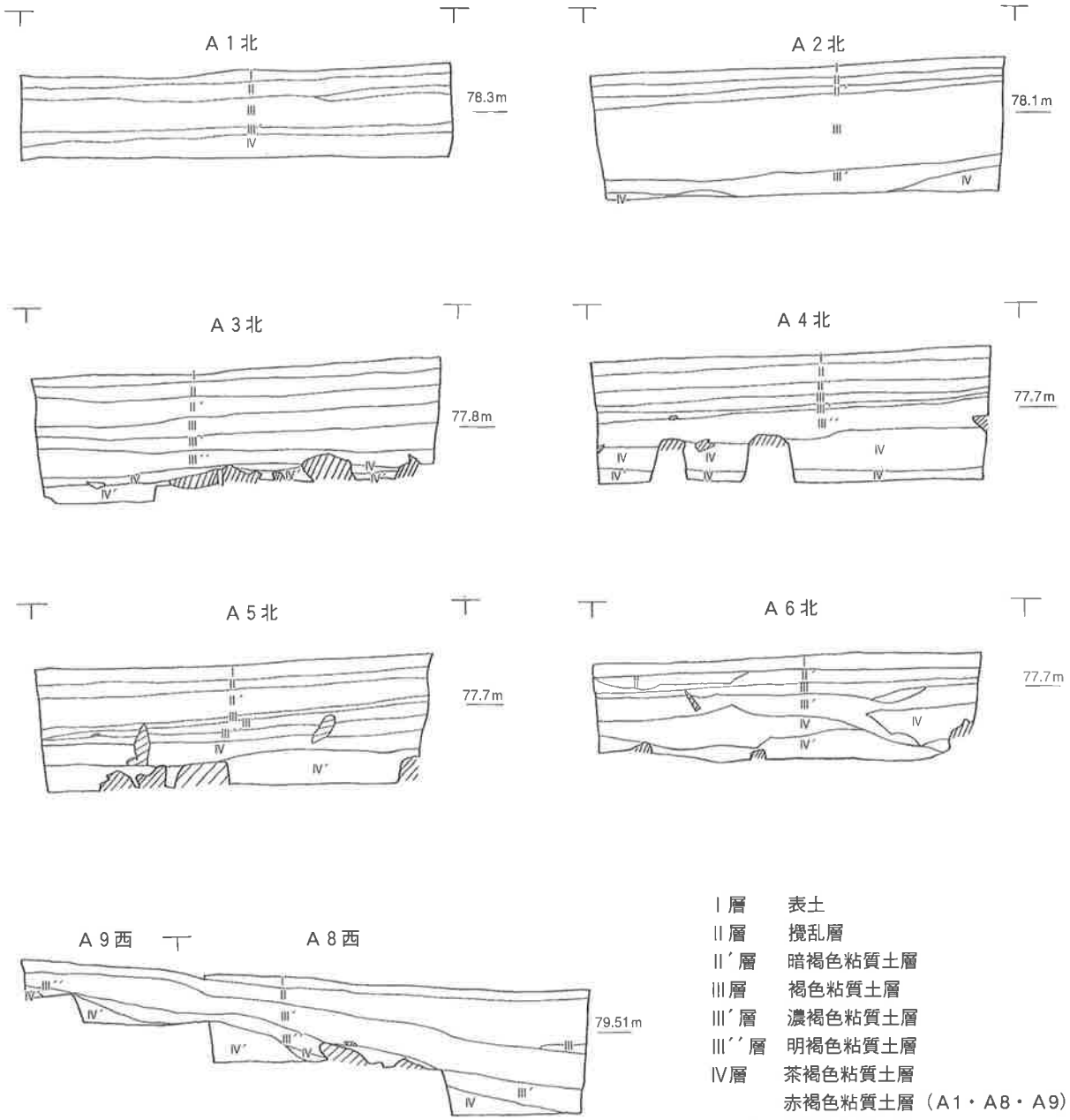


第７図　調査区設定図（１／1000）

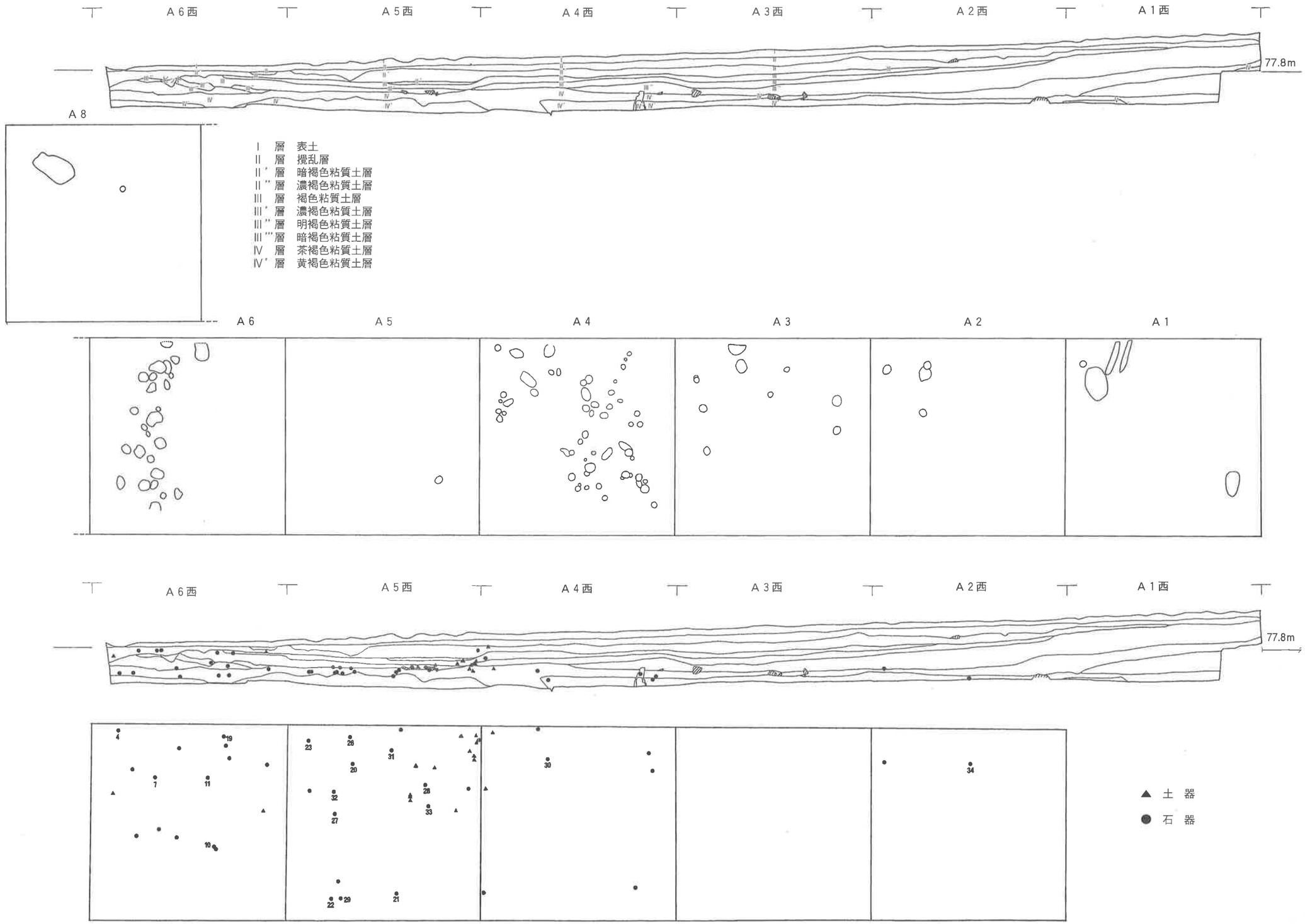
2．層　位（第8～9図）

今回の調査地点は、遺跡内でも標高が低い約78m付近の調査で、Ａ１区の最北端で約79mあり、南側に向かって緩やかに傾斜しており、最も低い地点がＡ６区で約78.1mを計る。Ａ９区は調査区内でも一段高くなった地点で約80.5mである。Ａ１～Ａ６区は畑地として利用されており、農作物の栽培を効率的に行うため大型機械が導入されており、表土の下には攪乱層が確認された。

Ａ１～Ａ２区は地表面から1.6～1.7m、Ａ３～Ａ５区は1.4m、Ａ６区は1.2mほど掘り下げを行った。Ａ１～Ａ６区はほぼ同じ土層の堆積状況が確認できた。表土の厚さは0.1～0.2m、Ⅱ層の攪乱層が0.1～0.2m、Ⅱ’層の暗褐色粘質土層が0.2～0.3mであった。Ａ５～Ａ６区のⅡ”層の濃褐色粘質土層が



第８図　調査区土層図（１／80）



第９図　調査区土層図及び遺構配置図及び遺物垂直分布図（1／80）

0.1～0.3m、Ⅱ'''層の褐色粘質土層が約0.1m、A5区に見られるⅡ''''層の暗褐色粘質土層が約0.1m、Ⅲ層の褐色粘質土層は、A1区では0.5m、A2～A6区では0.1～0.2m、同じくA2～A6区に見られるⅢ'層の濃褐色粘質土層が0.1～0.3m、A1区のⅢ'層とA2～A6区のⅢ"層の明褐色粘質土層が0.1～0.3m、A6区のⅢ'''層の明褐色粘質土層が0.1～0.3m、A1区のⅣ層の赤褐色粘質土層が0.3～0.5m、A2～A6区のⅣ層の茶褐色粘質土層が0.1～0.5m、A1・A2区のⅣ'層の赤褐色粘質土層が0.1～0.2m、A3・A4区のⅣ'層の茶褐色粘質土層が0.1～0.3m、A5・A6区のⅣ'層の茶褐色粘質土層が0.1～0.4m、A1・A2区に見られるⅤ層の黄褐色粘質土層が約0.1mとなっている。A1・A2区のⅣ'・Ⅴ層、A3～A6区のⅣ・Ⅳ'層は玄武岩風化土層で、盤となっている。A8区は表土から1.5mほど掘り下げた。表土の厚さが0.1m、Ⅱ層の暗褐色粘質土（旧耕作土）が0.2～0.5m、Ⅲ層の攪乱層が0.1～0.2m、Ⅲ'層の褐色粘質土層が0.2～0.5m、Ⅲ"層の明褐色粘質土層が0.1～0.2m、Ⅳ層の赤褐色粘質土層が0.1～0.3m、Ⅳ'層の濃赤褐色粘質土層は、玄武岩風化土層で盤となっている。A9区は0.7mほど掘り下げた。表土の厚さが0.1m、Ⅱ層の暗褐色粘質土（旧耕作土）が0.05m、Ⅲ層の茶褐色粘質土層が0.2～0.4m、Ⅲ'層の茶褐色粘質土層が0.1～0.2m、Ⅳ層の赤褐色粘質土層は0.1m、Ⅳ'層の濃赤褐色粘質土層は、玄武岩風化土層で盤となっている。

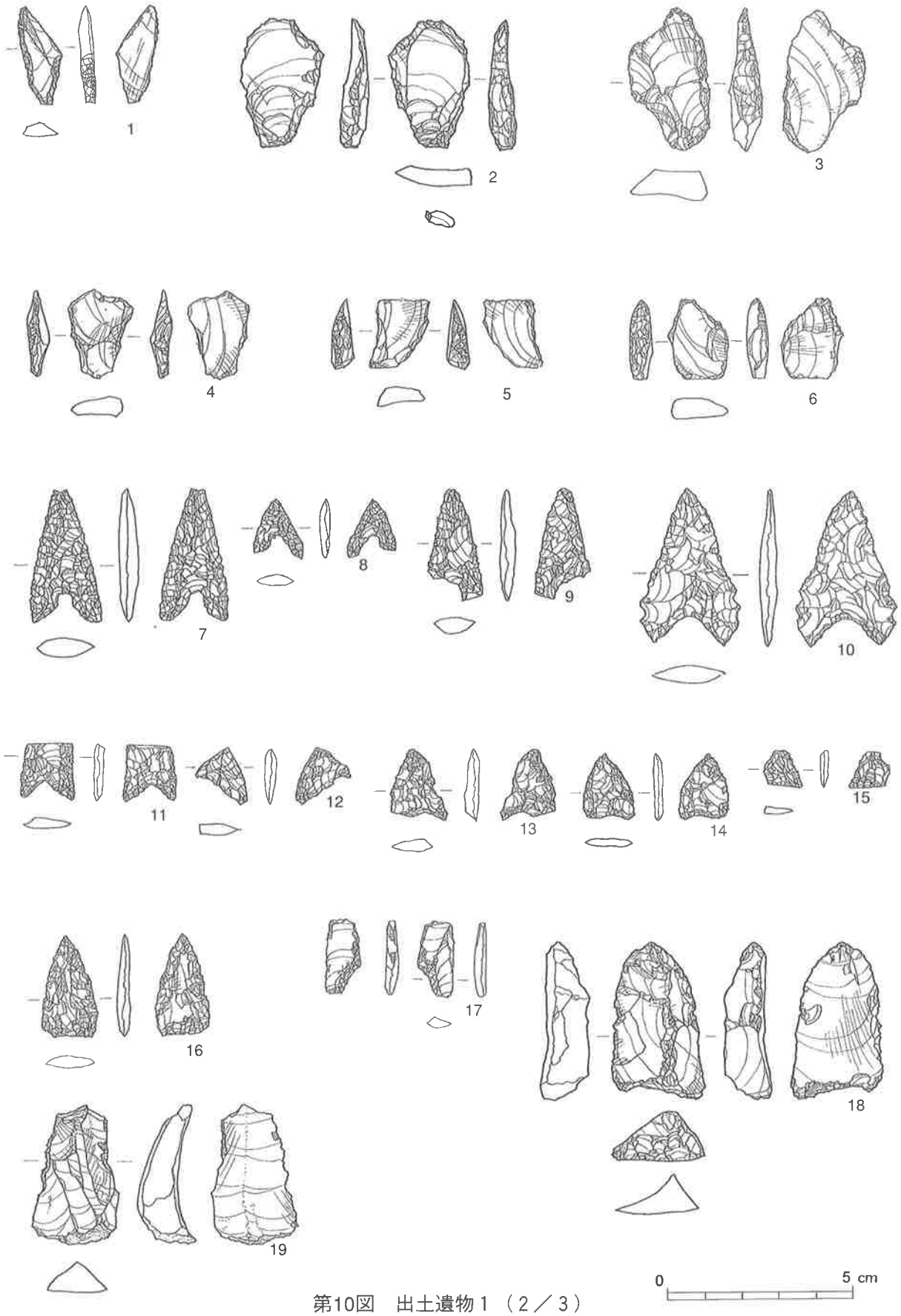
3．遺　構（第9図）

遺構は、A1区のⅢ層から土壙4基とピット1基を検出した。A2区ではⅢ層からピット5基、Ⅳ層にピット1基を検出した。A3区のⅢ層からピット10基を検出した。A4区ではⅢ"層からピット20基、Ⅳ層・Ⅳ'層からピット42基を検出した。A5区ではⅣ層からピット1基を検出した。A6区のⅡ層から、ほぼ垂直に打ち込んだ状況で杭が残っていたピットを1基、Ⅲ層からピットを26基を検出した。A8区のⅢ層から土壙1基とピット1基を検出した。A9区ではピットや土壙は検出できなかった。土壙には楕円形状及び西側まで延びていると思われる溝状がある。A8区の土壙は長さ約1m、幅約0.6m、深さ約0.7mであった。いずれの土壙とも遺物等の出土がないため性格等については不明である。

ピットはA4区のⅢ"・Ⅳ・Ⅳ'層とA6区のⅢ層に集中しているにもかかわらず、その間のA5区にはⅣ層に1基のみであった。このA5の調査区には全体に玄武岩の礫が散在していたが、人為的に手を加えたような点は確認できなかった。

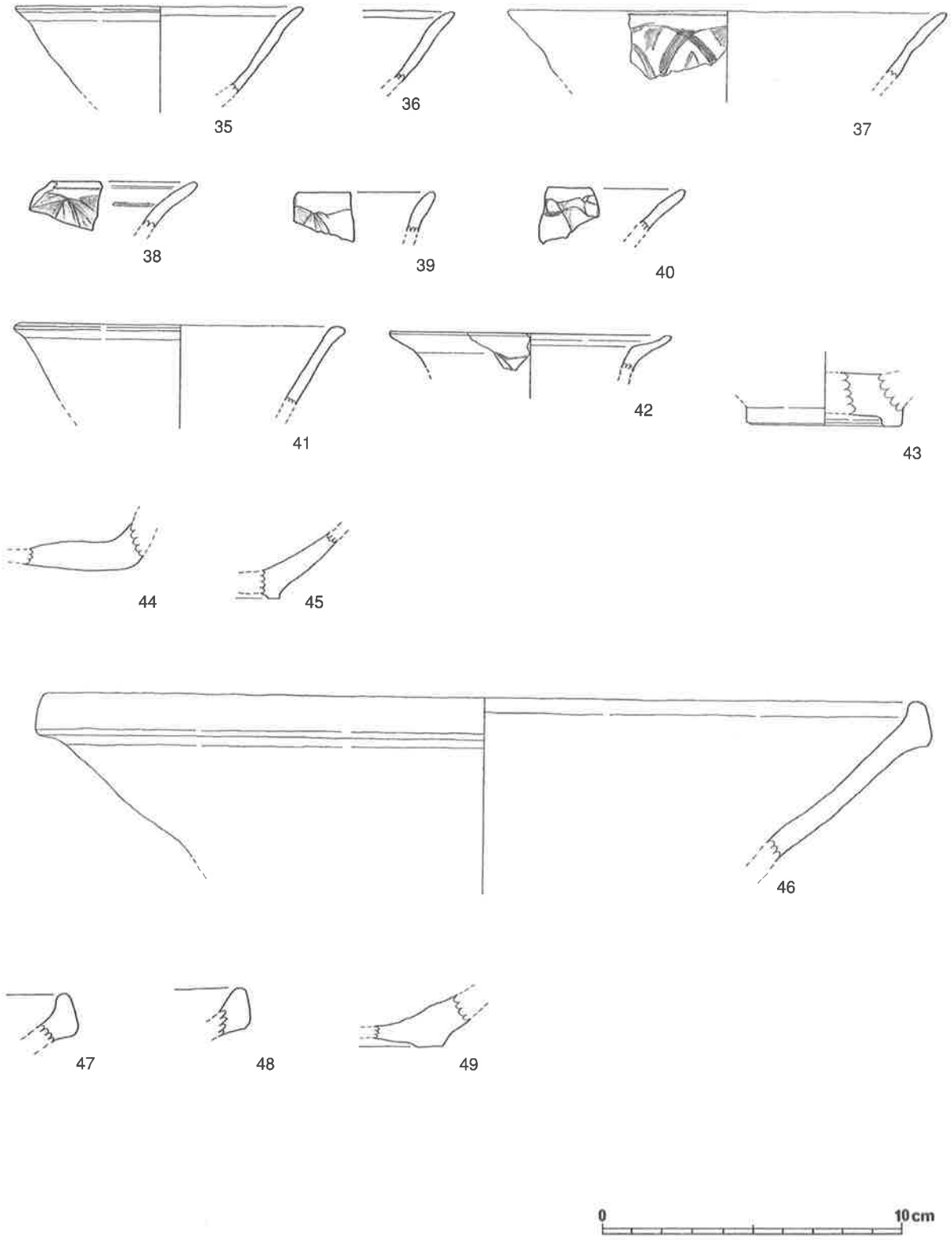
ピットの形状は、ほぼ円形で直径約20cm前後の大きさのものがほとんどで、深さも約15cm前後のものが多く、まれに約20cmまでのが検出できた。比較的浅いピットが集中していることが確認できた。このように比較的ピットが小さくて浅い。時期等については、出土した遺物から縄文・中世の時期が考えられるがピット自体が貧弱であるため時期の判断は難しい。

今回の調査で、調査区の東側と西側にまでピットが広がっている可能性がでてきた。しかし、今回は限られた調査区であったため将来の面的な調査の段階に委ねて建物跡等の復原は検討したいと考えている。

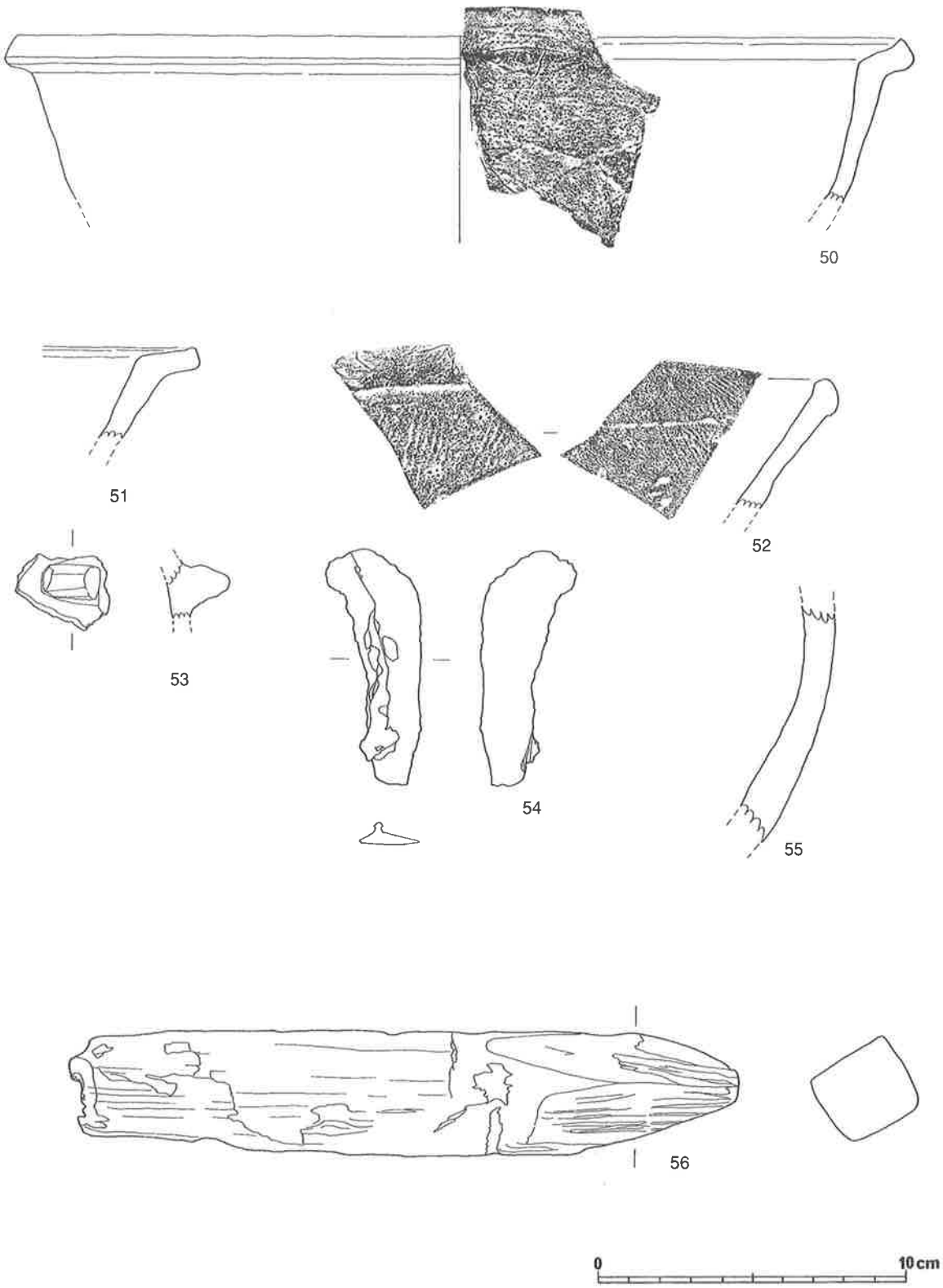


第10図　出土遺物１（２／３）

第11図　出土遺物２（２／３）



第12図　出土遺物３（１／２）



第13図　出土遺物４（１／２）

4．遺　物（第10～13図）

遺物については、Ａ１～Ａ６区のⅡ’層から中世陶磁器や土師器、黒曜石製品が出土している。また、Ⅲ～Ⅳ層からは旧石器時代の黒曜石製品と黒曜石剥片、安山岩が出土している。Ⅲ層は遺物包含層と考えられる。Ａ８区のⅢ’層からは黒曜石製品、土師器が出土している。出土した遺物の量はさほど多くなく、622点であった。このうち黒曜石は125点で全体の20％を占めている。表土及び攪乱層からは近世以降の陶磁器が125点出土している。622点のうち原形をとどめている遺物が少なく、滑石製石鍋及び滑石の破片32点、土師器47点、輸入陶磁器32点等が出土している。このうち実測できた遺物が56点であり、破片・細片が多くて実測できなかった遺物がほとんどであった。

１～６は旧石器時代の石器で、１は典型的な小型のナイフ形石器である。縦長剥片を用いており側縁部の加工は二側縁加工を施しており、主要剥離面側よりのブランティング加工は急傾斜になっている。刃部には刃こぼれが認められる。２～６は台形石器である。２は縦長剥片を利用しており主要剥離面側からブランティング加工が施されている。灰色黒曜石製である。３は幅広剥片を利用して一側縁のみ主要剥離面側からブランティング加工が施されている。刃部には使用痕が認められる。４～６は２・３に比べて小型の台形石器である。いずれも幅広剥片を利用しており、主要剥離面側からのみブランティング加工が施されている。

７～17は石鏃で、10の灰色黒曜石製以外はすべて黒色黒曜石製である。８・10・14・16は完形品である。７は側縁が鋸歯状に施されている。先端部を一部欠損している。二次加工は非常に緻密に丁寧に施されている。８は小型の石鏃で二次加工も丁寧である。９は両脚部を欠損しているがほぼ左右対称に仕上げている。10は石鏃の中でも最も大きく全体に二次加工は粗雑であるが側縁は部分的に若干鋸歯状の加工を施している。11は先端部を欠損している。側縁が直線的に施されている。12は脚部の資料である。13は両脚部を欠損しており、裏面に一部自然面を残している。14は全体的に大まかな剥離である。15は脚部の資料としているが先端部の可能性もある。二次加工は丁寧である。16は側縁部が非常に丁寧に施されている。17は剥片鏃であろう。形状の1／2を残している。石鏃では抉りの形状で深いもの、浅いもの、直線的なものに分類ができるようである。

18は縦長剥片の先端部に二次加工を施したスクレイパーである。全面にパティナが著しい。19は使用痕ある剥片で一側縁のみ使用痕が認められる。先端部には自然面を有している。

20は刃部と基部を欠損しているが、横長剥片を利用して主要剥離面側からブランティング加工が施されており台形石器の可能性がある。21～26・32は使用痕ある剥片。27～31は剥片。33・34は残核である。

35～43・45は中国産輸入陶磁器である。35は白磁で、口禿げのⅢである。おそらく器形から高台を有すると思われる。釉は黄色気味の白色で光沢があり、貫入が多く入っている。胎土は灰白色で、黒色粒を含んでいる。復元口径9.6cmで、Ａ４区Ⅲ”層出土。36のＡ４区Ⅲ層出土と同一個体と思われる。37～43は龍泉窯系青磁碗で、37～40は体部外面に鎬蓮弁文を有するＩ－５ｂ類である。37の釉は緑灰色で光沢があり、貫入が入っている。胎土は灰色で、黒色粒を含んでいる。復元口径14.6cmを計る。38は37と釉・胎土とも同一色調である。Ａ３区Ⅱ’”層出土。39は茶味を帯びた緑灰色の釉で、胎

土は灰色である。Ａ４区Ⅲ層出土。40は灰色味を帯びた緑色で、全体に黄白色の粒が入っている。胎土も黄色味を帯びた灰白色である。Ａ５区Ⅱ""層出土。41は黄色味を帯びた緑色でやや不鮮明な釉調を呈している。全体に貫入が走っており、胎土も灰色である。復元口径 11.0cmである。Ａ５区Ⅱ'層出土。42は杯で、口縁部を鋭く外反したⅢ－２類と思われる。釉は緑灰色で光沢があり、貫入が入っている。胎土は灰黄色で、黒色粒を含んでいる。口径9.4cmである。Ａ３区Ⅱ'層出土。43は碗の高台部分の破片である。釉は緑色で一部畳付まで施釉されている。胎土は灰白色で、黄白色の斑点が入っている。復元底径5.2cmを計る。Ａ４区Ⅲ層出土。45は陶器の盤の底部と思われる。内面に淡黄色釉で施釉され、外面は露胎となっている。Ａ４区Ⅲ層出土である。

44は土師器である。底部には布目痕が認められるため蓋の可能性もある。Ａ８区Ⅱ層出土である。

46～49は東播系須恵質捏鉢である。46はＡ５区Ⅱ'層とⅡ"層出土の接合資料である。口縁端部を上方につまみだしており、体部はヨコナデによって成形されている。内外面ともに青味がかった灰色で、胎土に白色の微細な砂が混ざっている。47も同じタイプの資料で、Ａ４区Ⅲ層出土である。48は口縁端部が丸みを帯びている。Ａ５区Ⅱ'層出土である。49は捏鉢の底部片で、外面底部は糸切りで、内面は丁寧なナデ仕上げが施されている。Ａ５区Ⅲ層出土である。

50は土師質土器で口縁部が「く」字状に外反しており端部をつまみあげている鍋である。復元口径は29.0cmを計る。外面は灰褐色で、内面は明黄白色を呈し、内面は丁寧なヨコナデが施されている。外面体部上位に煤の付着が認められる。胎土には微細な砂粒を含んでいる。Ａ５区Ⅱ""層出土である。51も50と同じタイプの資料である。Ａ４区Ⅲ層出土。52は瓦質の鍋で、内外面ともカキメ状のヨコハケが施されている。Ａ５区Ⅲ層出土である。

53は滑石製石鍋を再利用した製品でバレン状石製品である。表面を凸起状に削り出し裏面を擦っている。紐の部分を穿孔した跡が認められる。同資料は志佐町楼楷田遺跡・御厨町池田遺跡等でも出土している。Ａ４区層出土である。

54は用途不明の青銅製品でＡ８区層出土。重さ29.6ｇである。

55は弥生土器甕形土器の胴部片と思われる。内外面とも灰茶褐色を呈する。胎土に石英粒を多く含んでいる。表採資料である。

56はＡ６区Ⅱ層出土の杭である。腐蝕が著しいが、杭の先端部を４回削っている。断面はほぼ四角形状を呈し、３か所に杭を縛ったような痕跡が認められる。材質は不明で、長さ 21.25cm、厚さ 3.9cmを計る。

出土遺物については、旧石器・縄文・中世の時期が多い。石器については計測表を別に記載いている。第９図には主にⅢ層とⅣ層から出土した遺物を対象として垂直分布図を作成した。今後の研究の参考にしていただければと考えている。

表２　小船遺跡出土石器計測表

挿図番号	地　　区	器　種	石　質	法　量				備　　考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	
1	KOB2A4-Ⅳ	ﾅｲﾌ形石器	黒 曜 石	2.60	1.10	0.40	1.00	
2	KOB2A2-Ⅲ'	台形石器	灰色黒曜石	3.40	2.15	0.75	4.20	
3	KOB2A4-Ⅲ'	〃	黒 曜 石	3.80	2.15	0.80	4.80	
4	KOB2A6-ⅣS9	〃	〃	2.35	1.70	0.55	1.40	
5	KOB2A3-Ⅲ	〃	〃	1.80	1.55	0.55	1.20	
6	KOB2A2-Ⅰ	〃	〃	2.10	1.60	0.55	1.80	
7	KOB2A6-Ⅱ'S3	石　　鏃	〃	3.50	1.85	0.50	2.40	先端部を欠損
8	KOB2A5-Ⅱ'	〃	〃	1.50	1.25	0.25	0.20	脚部を欠損
9	KOB2A4-Ⅲ"	〃	〃	2.90	1.45	0.40	1.20	先端部と脚部を欠損
10	KOB2A6-Ⅱ'S2	〃	灰色黒曜石	4.15	2.65	0.50	3.20	
11	KOB2A6-Ⅲ'S6	〃	黒 曜 石	1.50	1.40	0.30	0.60	
12	KOB2A5·6-Ⅲ-Ⅲ'	〃	〃	1.50	1.45	0.30	0.40	片方の脚部のみ残存
13	KOB2A8-ⅢS1	〃	〃	1.85	1.50	0.60	0.60	
14	KOB2A5-Ⅱ'	〃	〃	1.70	1.30	0.25	0.40	
15	KOB2A4-pit21	〃	〃	0.95	1.00	0.20	0.20	片方の脚部のみ残存
16	KOB2A4-Ⅲ	〃	〃	2.65	1.45	0.35	1.00	
17	KOB2A3·4-Ⅲ'Ⅲ"	〃	〃	1.95	0.95	0.35	0.60	先端部と脚部を欠損
18	KOB2A4-Ⅲ	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	〃	4.15	2.45	1.30	9.40	
19	KOB2A6-Ⅲ" S8	使用痕ある剥片	〃	3.65	2.30	1.55	7.40	
20	KOB2A5-ⅣS5	台形石器?	〃	2.70	1.75	0.80	2.65	
21	KOB2A5-ⅣS13	使用痕ある剥片	〃	4.40	1.65	0.50	4.75	
22	KOB2A5-ⅣS11	〃	〃	3.35	2.25	0.30	1.75	
23	KOB2A5-ⅣS6	〃	〃	1.80	1.35	0.15	0.65	
24	KOB2A4-Ⅳ	〃	〃	3.25	1.80	0.45	2.40	
25	KOB2A4-Ⅳ	〃	〃	2.10	1.70	0.25	1.15	
26	KOB2A5-Ⅲ'S4	〃	〃	2.35	2.60	0.45	2.50	
27	KOB2A5-ⅣS9	剥　　片	〃	3.20	2.15	0.70	4.10	
28	KOB2A5-ⅢS1	〃	〃	3.10	1.80	0.40	3.15	
29	KOB2A5-Ⅳ'S12	〃	〃	2.65	1.70	0.60	1.85	
30	KOB2A4-Ⅲ"S4	〃	灰色黒曜石	5.00	3.80	1.60	24.80	
31	KOB2A5-ⅣS3	〃	黒 曜 石	2.45	1.75	0.40	1.80	
32	KOB2A5-ⅣS8	使用痕ある剥片	〃	3.55	1.80	0.85	4.40	
33	KOB2A5-Ⅳ S14	石　　核	〃	3.00	2.65	1.10	7.10	
34	KOB2A2-ⅣS2	〃	〃	2.90	2.75	1.30	8.10	

第Ⅳ章　科学分析

1．小船遺跡における植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、おもにイネ科植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

2．試料

分析試料は、A１区北壁地点から採取された試料２（Ⅲ層上部）、試料３（Ⅲ層下部）、試料４（Ⅲ’層）、試料５（Ⅳ層上部）、試料６（Ⅳ層下部）の５点である。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１ｇに直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射(300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

4．結果および考察

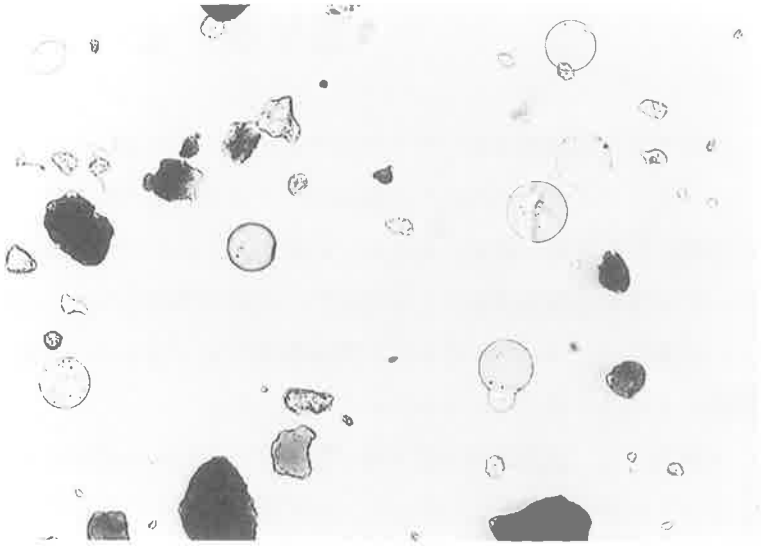
A１区北壁地点から採取された試料２（Ⅲ層上部）、試料３（Ⅲ層下部）、試料４（Ⅲ’層）、試料５（Ⅳ層上部）、試料６（Ⅳ層下部）の５点について分析を行った。その結果、植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった（写真参照）。

植物珪酸体が検出されない原因としては、①植物珪酸体を形成する植物（イネ科、カヤツリグサ科、シダ類、照葉樹、落葉樹の一部など）が生育していなかったこと、②火山灰堆積層や洪水堆積層などのように土層の堆積速度が極端に速かったこと、③強アルカリ性土壌など何らかの原因で植物珪酸体が溶解・消失したことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。今後、現地調査や土壌理化学分析などを行うことで、植物珪酸体が検出されない原因が究明されると考えられる。

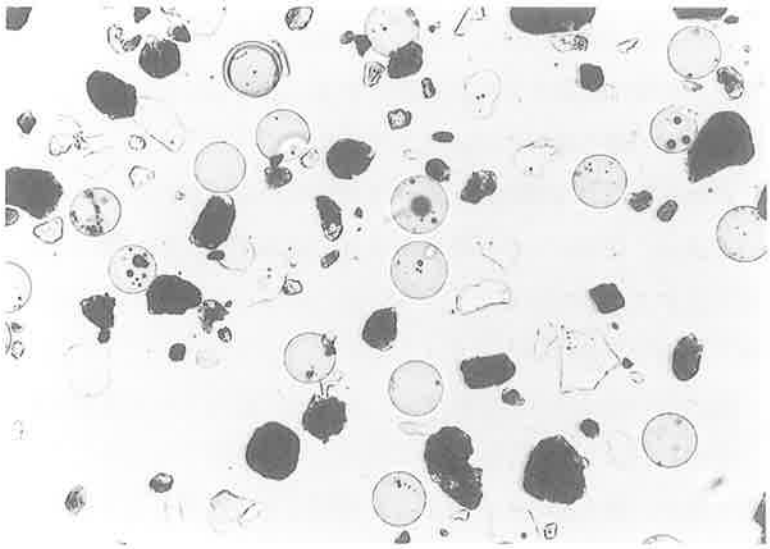
文献

杉山真二　「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」　『植生史研究，第２号』　p.27～37．1987

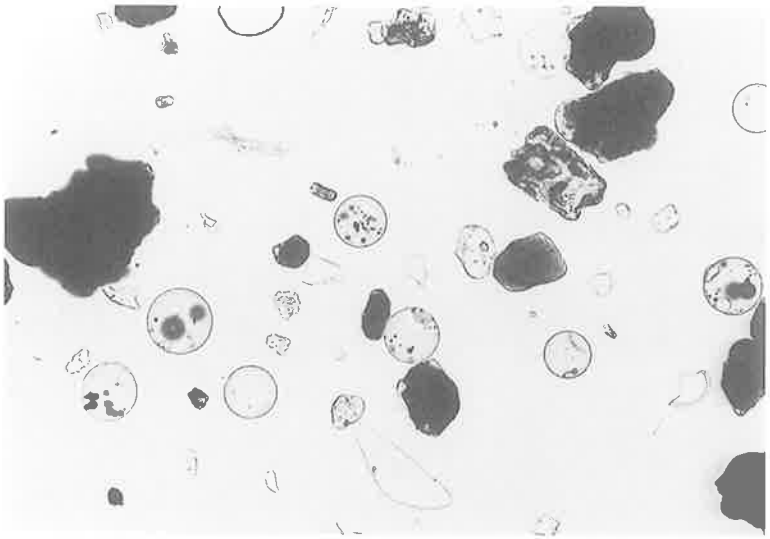
藤原宏志　「プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー　『考古学と自然科学　９』　p.15～29．1976



試料 2



試料 3



試料 4

第V章　まとめ

国営農地再編整備事業に伴う松浦市御厨町の川内工区では、平成６年度の工区内の分布調査に始まり、平成８年度の小船遺跡の試掘調査、平成10年度の本調査、平成11年度の報告書刊行までおよそ６年を費やした計算になる。しかし、小船遺跡そのものは、本調査した１号支線道路部分の193㎡をのぞいて大部分を保存することができた。遺跡の調査自体は、工区の設計図がまとまるであろう９月頃より準備体制に入ったがなかなか図面作成がまとまらず、調査の開始に至らなかった。やっと調査を開始したのは平成11年１月26日からであった。

本調査では、試掘調査の結果をふまえて、当初から遺物の量はさほど多くないと考えていた。実際に出土した遺物は622点であった。試掘調査でもナイフ形石器、台形石器・石鏃、中国産輸入陶磁器である白磁・青磁が出土する遺物包含層が認められており、本調査でも同様な遺物構成になると予想を立てていた。

小船遺跡の近辺にはこれといった遺跡は見当らず、一番近い遺跡で南に中世の城跡と思われる大岳古墨と南東に位置する田川遺跡がある。特に田川遺跡からは、本遺跡と同じタイプのナイフ形石器や台形石器・輸入陶磁器が出土している。

台形石器は、典型的なものは出土していないが枝去木型タイプに属するものであろう。

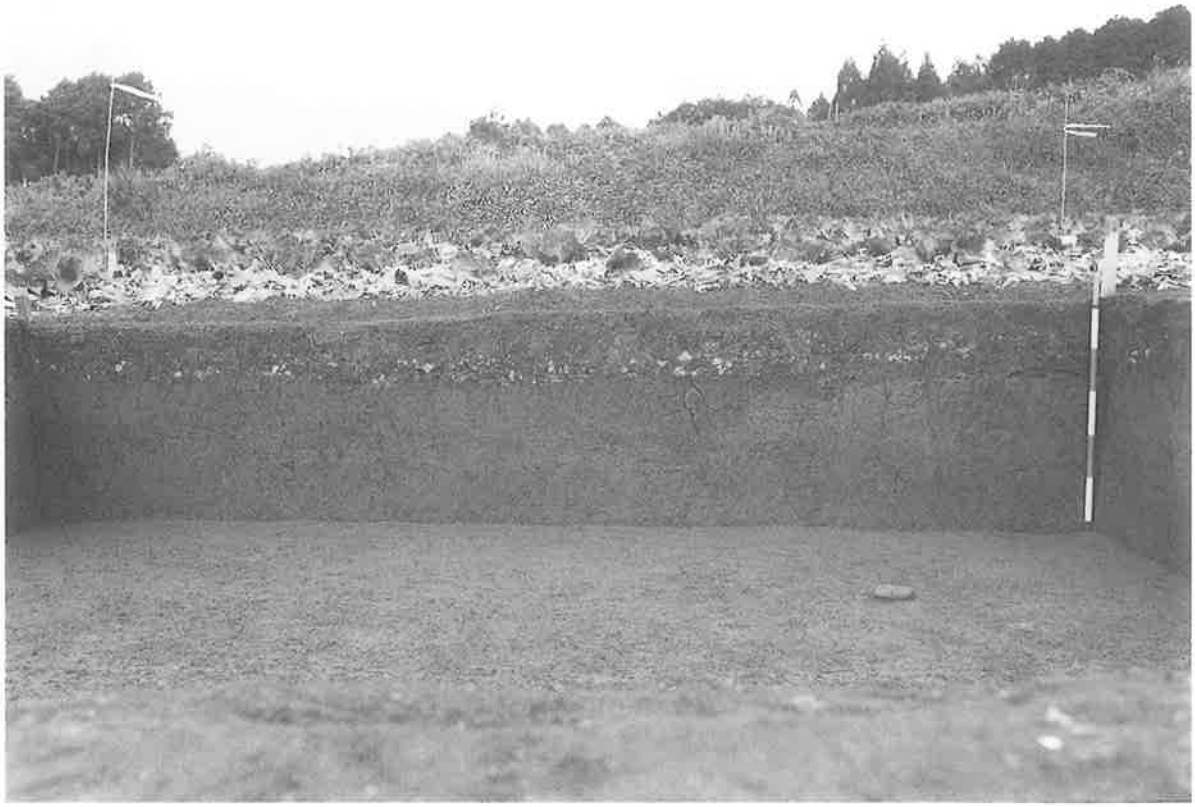
石鏃は、使用のためか先端部あるいは脚部を欠損しているものが多く、大きさ・抉りの形態も違う色々なタイプのものが出土していることは、定住生活の場としてよりも狩猟の場として考えた方が理解できるのではないだろうか。

輸入陶磁器は１３世紀前半から中ごろに限定される資料であったが豊富には出土していないため、一農村における生活用品として使用していたのではなかろうか。海上交易によって入手したとは考えられない。購入品とした方がより理解できる。農村の生活状況を考えると農村集落単位ごとの更なる周辺の分布調査が必要になったようである。

図　　版

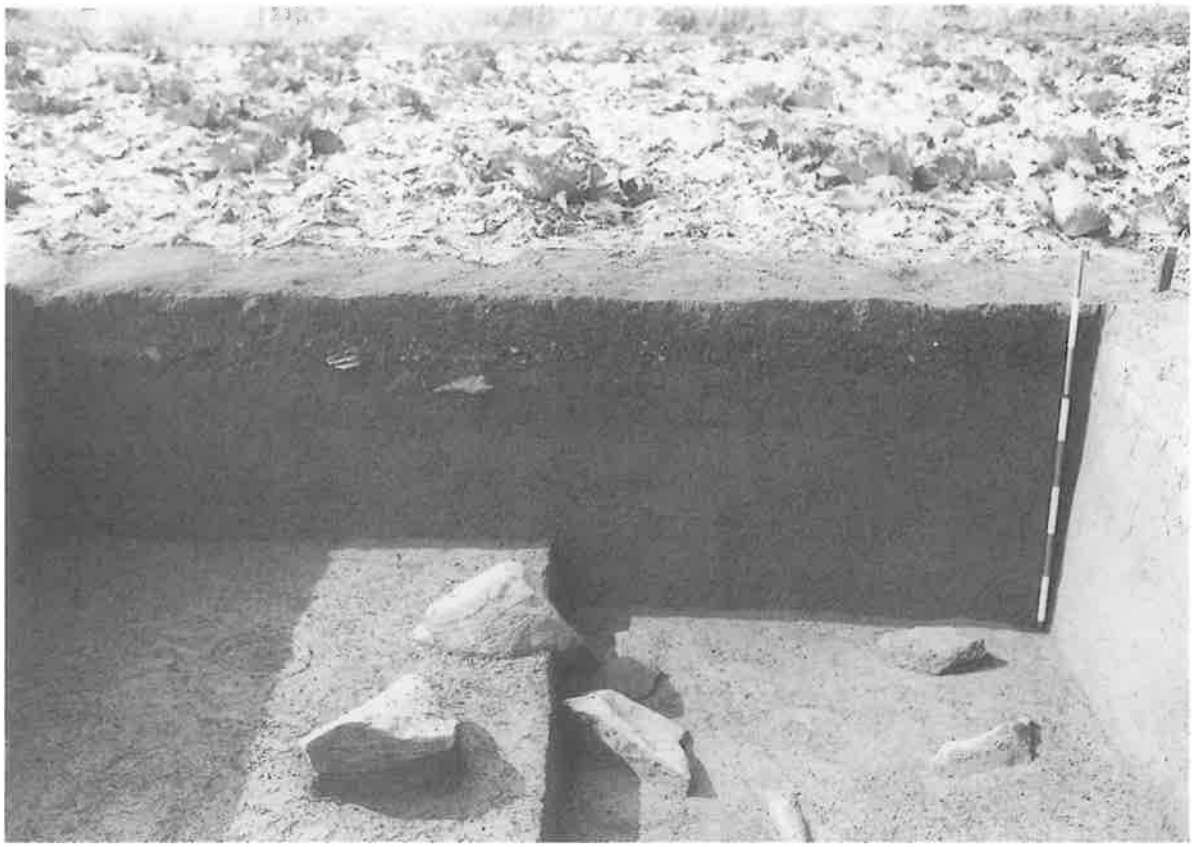
調　査　風　景

調　査　風　景



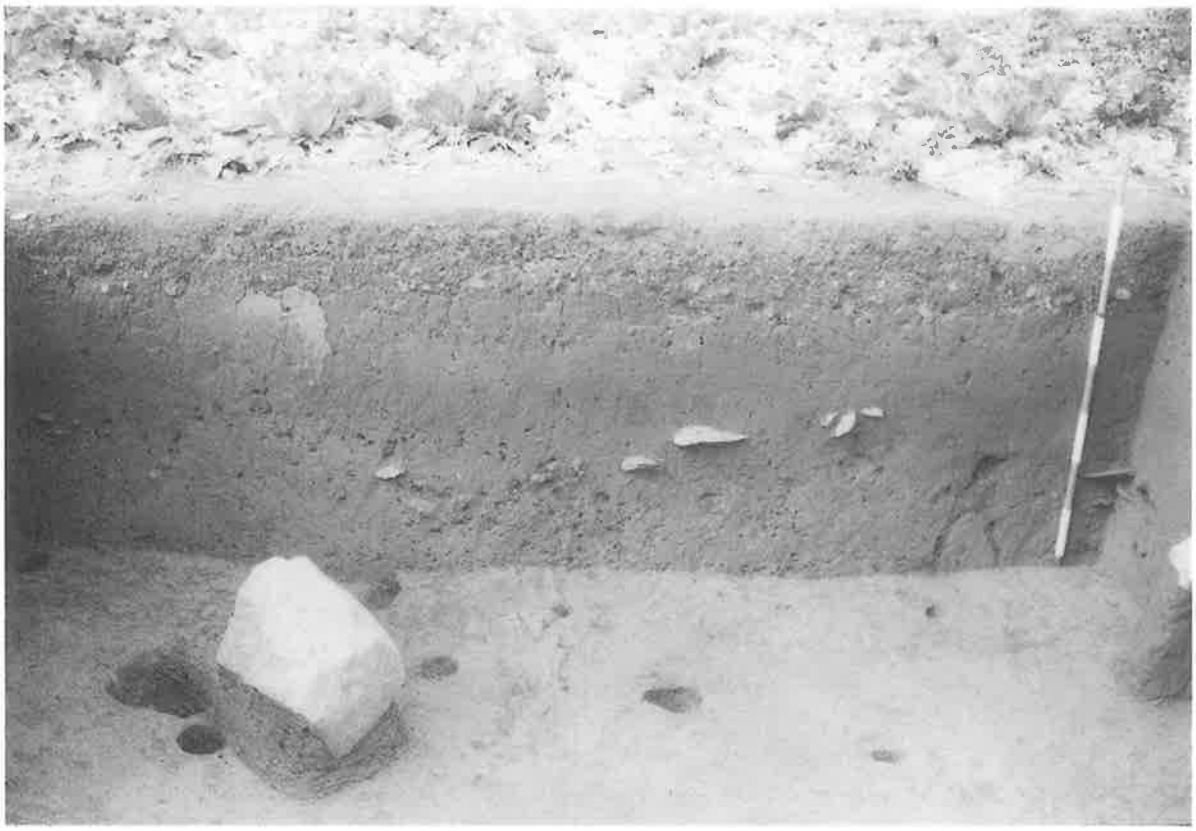
Ａ１区北壁土層

Ａ２区北壁土層

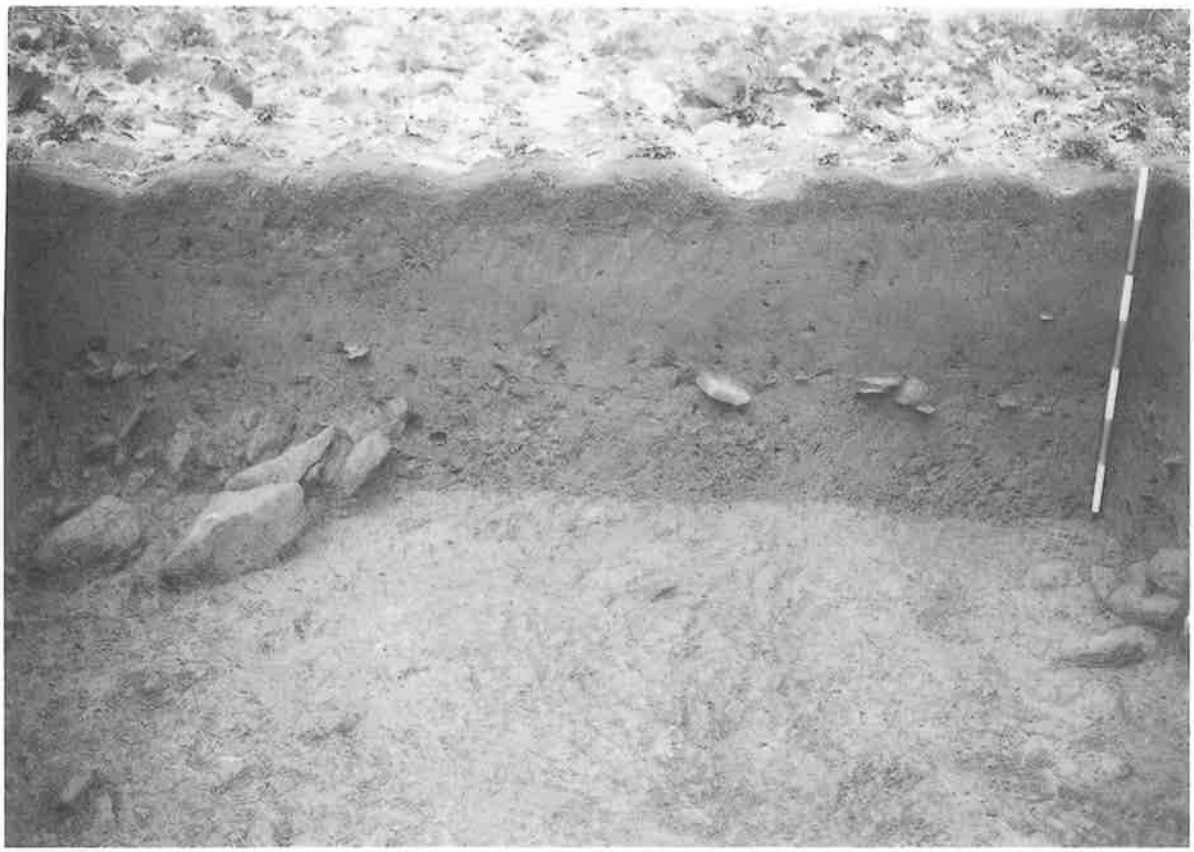


A 2 区西壁土層

A 3 区西壁土層



A 4 区西壁土層

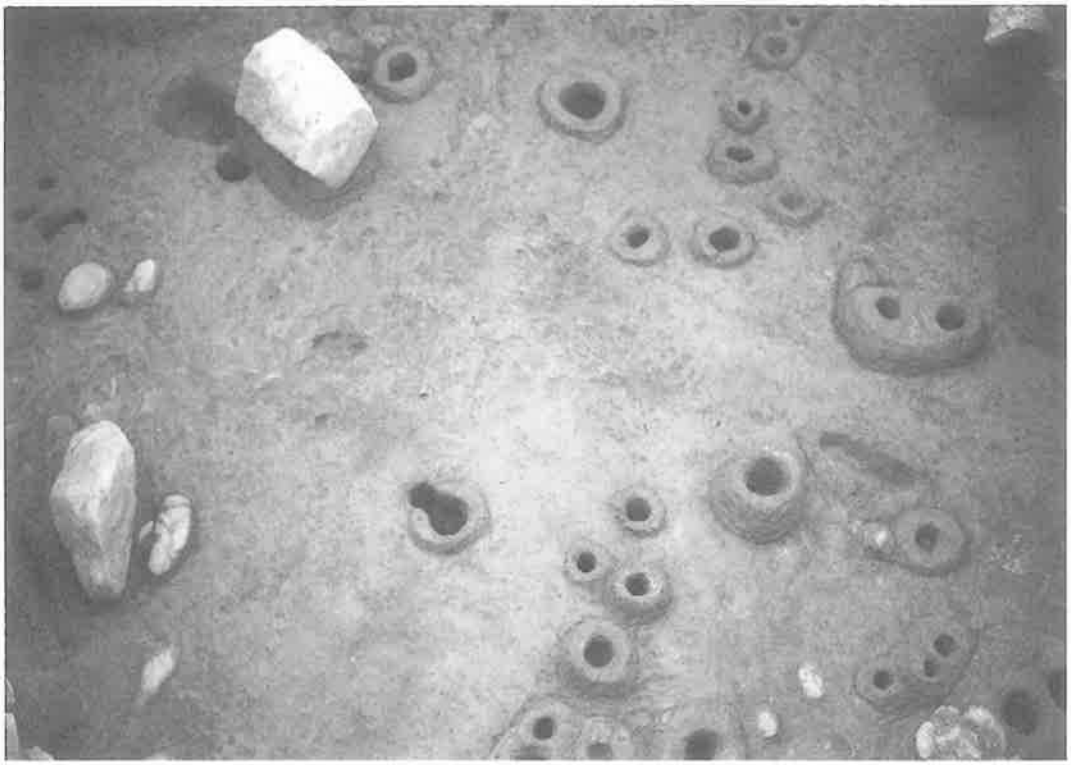


A 5 区西壁土層

A 6 区西壁土層

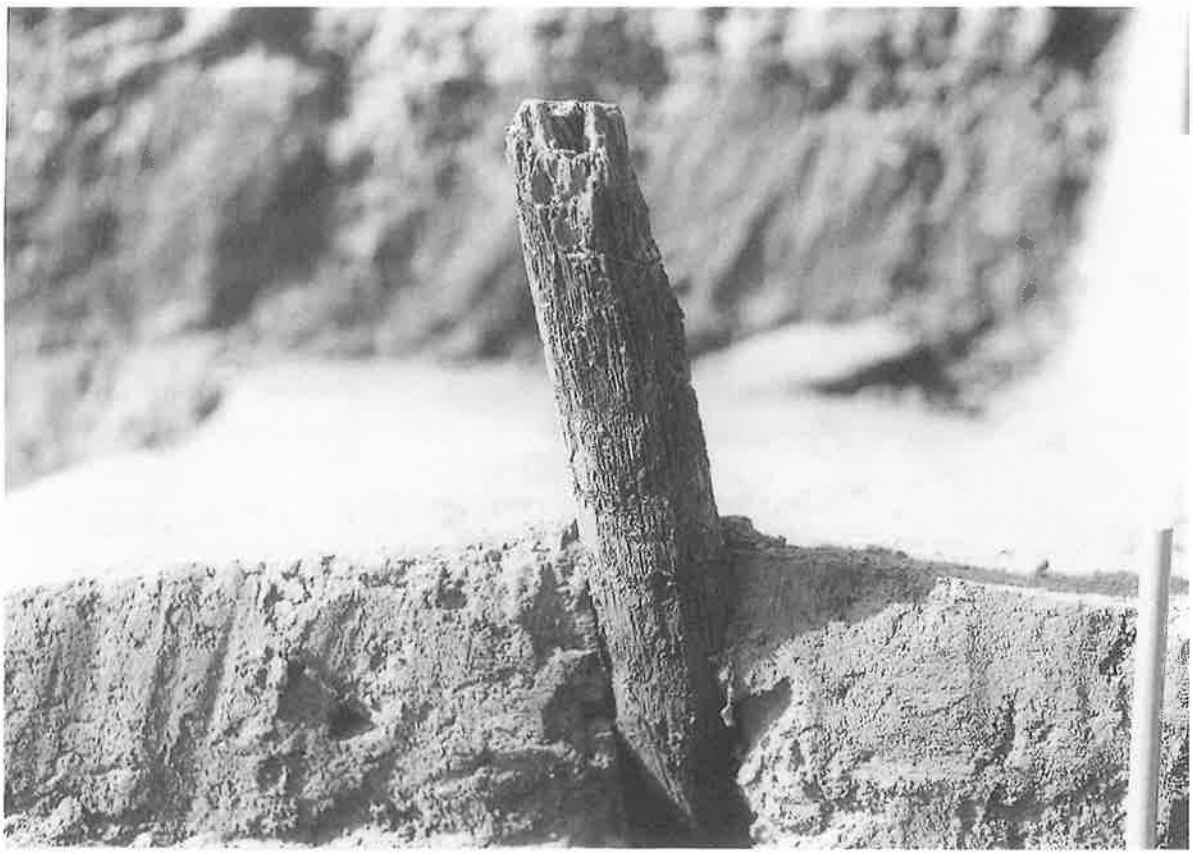
A 8 区西壁土層

Ａ４区ピット検出状況（西から）

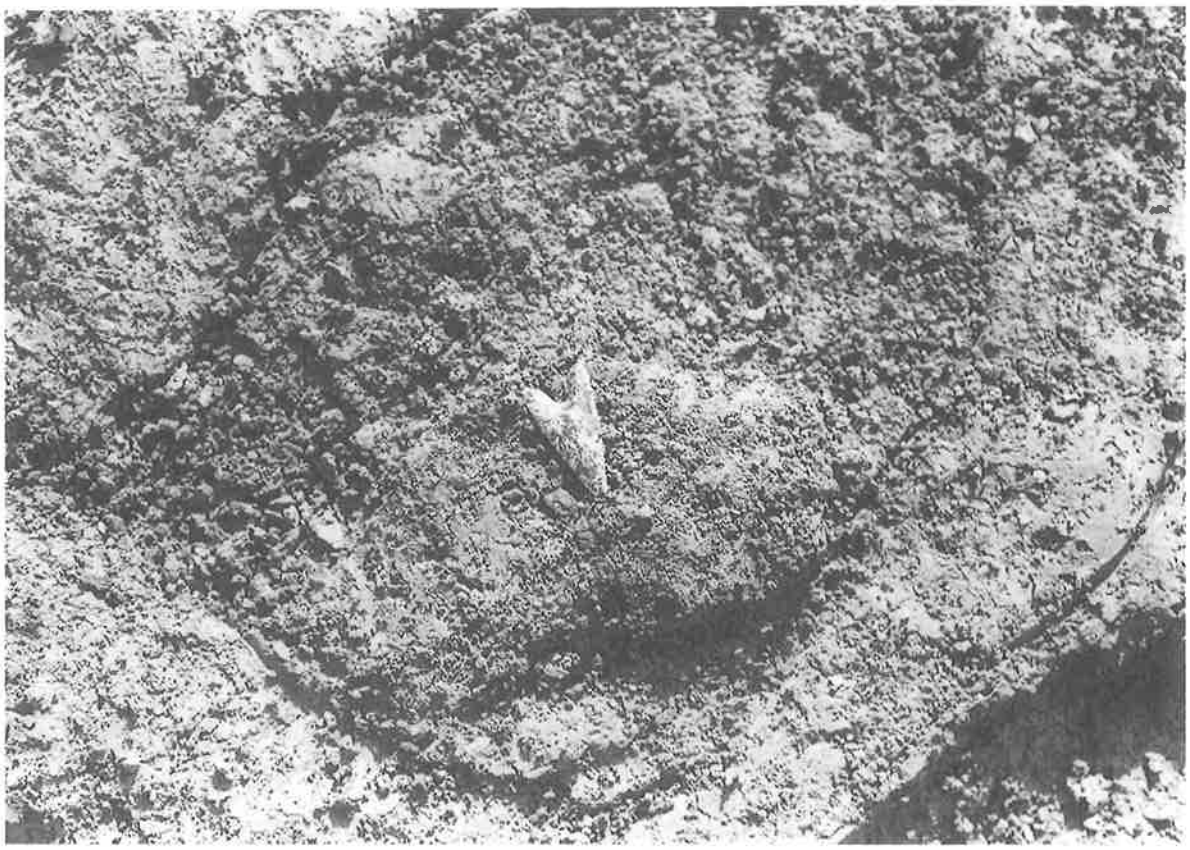


Ａ４区ピット検出状況（東から）

Ａ６区ピット検出状況（南から）



Ａ６区杭検出状況（南から）



Ａ６区遺物出土状況

Ａ５区遺物出土状況

出土遺物 1

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

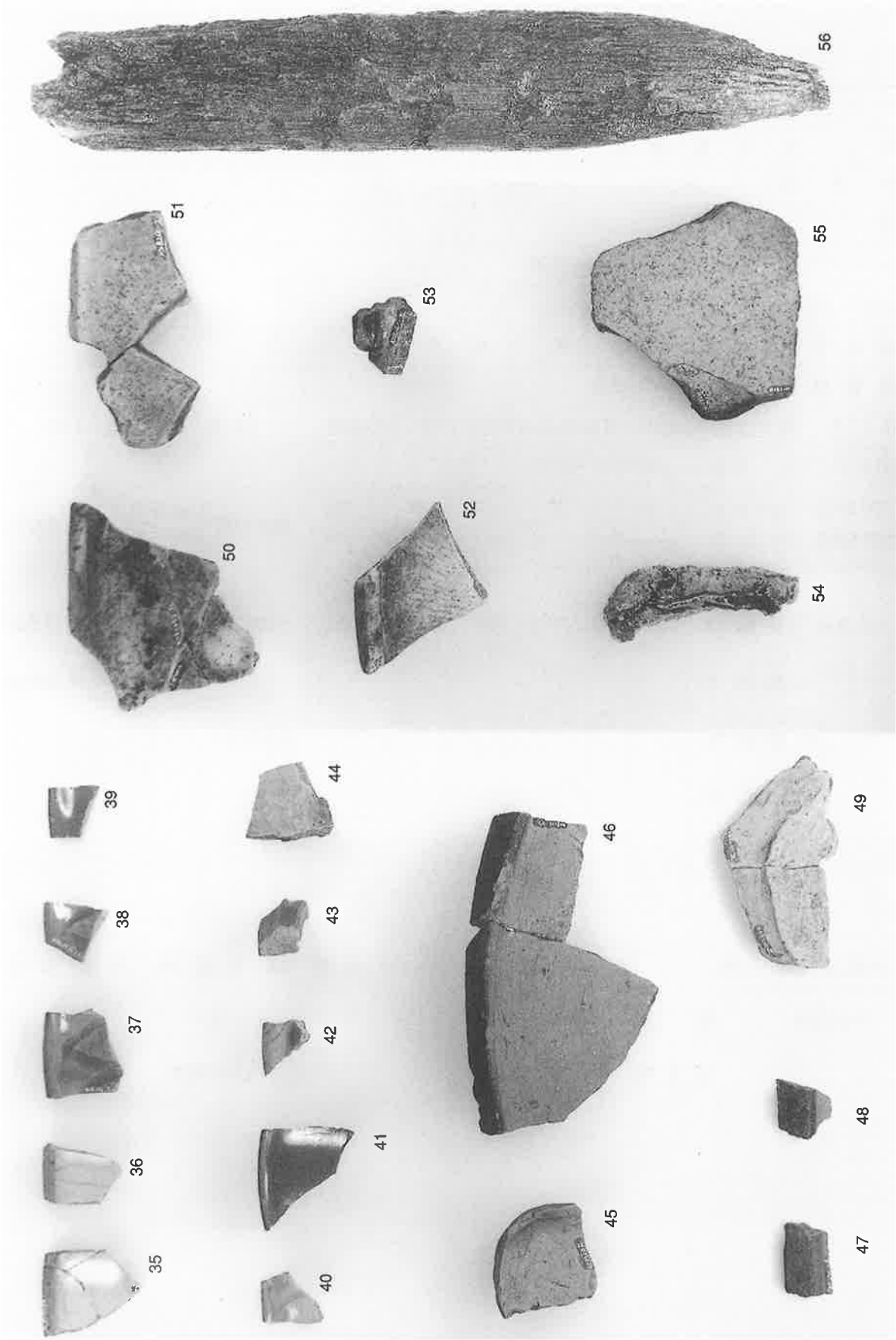
31

32

33

34

出土遺物 2



出土遺物 3

報 告 書 抄 録

ふりがな	こぶねいせき
書名	小船遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	中田敦之・明石拡子
編集機関	松浦市教育委員会
所在地	〒859－4598　長崎県松浦市志佐町里免365番地　　ＴＥＬ　0956－72－1111
発行年月日	西暦　2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こぶねいせき 小船遺跡	ながさきけん 長崎県 まつうらし 松浦市 みくりやちょう 御厨町 やまねめん 山根免	42208	102	33°20′40″	129°38′50″	19990126 ～ 19990317	１９３㎡	国営農地 再編整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小船遺跡	遺物 包含地	縄文 中世	柱穴	石鏃 輸入陶磁器	

松浦市文化財調査報告書 第15集

小 船 遺 跡

平成12年３月30日印刷
平成12年３月31日発行

発行　松浦市教育委員会
　　長崎県松浦市志佐町里免365番地
印刷　タイセイ印刷
　　長崎県松浦市志佐町白浜免660-76